日本語の「南北型方言分布」研究のための言語地図一覧

安部　清哉

【要旨】日本語の方言分布における「南北型方言分布」の研究は、柴田武（1963）の指摘にはじまり、従来、数点の言語地図の指摘に留まっていたが、その後、20を超える言語分布現象を指摘できた（安部2012.2にて該当現象を列挙）。安部（1999.9）での5葉の図以降の新たな候補図については未提示であったが、本稿では、当該地図を共有して研究を広く進めていくために、現時点で該当すると考えられる言語地図25図を一括して掲載し、それらについて、出典、該当語形とその分布特徴、境界線の位置ほかについて若干の補足情報を記載する。

「南北型方言分布」の「南北方言境界線」の地理言語学的位置は、日本列島内だけではく、アジアでは、中国語、朝鮮語それぞれの方言境界線に連続し、さらに、西洋側のインド・ヨーロッパ語の二大語派Centum-Satemの境界線との間にも、共通する言語現象が認められた（安部2013.3『東洋文化研究』15）。その意味で、日本の「南北型方言分布」は、世界規模での言語史研究上も重要な研究課題となるが、それに該当するこれら掲載言語地図の解釈も、その基礎的研究として、今後の重要な方言研究の課題である。（末尾に安部（2013.3）での音韻変化の修正を付す。）

キーワード：南北型方言分布境界線、気候境界線、方言分布パタン、地理言語学的解釈、表日本裏日本分布、方言区画

1　はじめに――南北型方言分布の言語史的意義

日本語の方言境界線として、東西方言境界線「糸魚川・浜名湖方言境界線」とならんで、もう1つ重要な境界線と考えられるのが、日本列島の方言を南北にわける境界線である（図Ⅰ、図Ⅱ参照）。

その境界線は、日本列島だけではなく、アジアへも連続している方言境界線であった（図A）。

また、その境界線と同様の背景をもつ言語・方言境界線は、ヨーロッパのインド・ヨーロッパ語族の二大語派（＝方言）のCentum-Satem境界にも見出せた（図B）。

それゆえ、日本語の「南北型方言分布」の個々の言語地図を解釈していくことは、世界的言語史上の問題を検討していくためにも、重要な研究課題となる。

この方言分布については、安部（1999）以降、いくつかの関連する報告をし（参考文献参照）、近年では、安部201.2で該当すると考えられる方言地図の一覧を提示し、安部（2013.3、『東洋文化研究』15）においても、インド・ヨーロッパ語族の二大語派（＝方言）のCentum-Satemとの共通現象を指摘した。

本稿では、これらの続編として、日本語方言の「南北型方言分布」の候補とした言語地図25図（現時点での該当現象）を、当該地図を共有して研究を広く進めていくために一括して掲載し、一部には、出典、該当語形とその分布特徴、境界線の位置ほかについて、若干の解説を付すものである。

なお、この「南北型方言分布」の基本的諸特徴については、安部（2013.2）にて概説したので、そちらを参照されたい。また、該当する25の言語地図のいくつかについては、これまでいくつか個々に解釈してきており（例えば近年のもので、語彙では安部（2011.3）「酸っぱい」の分布、

音声に関しては安部（2012.3）など、参考文献参照)、また、全体としても新たに地理言語学的解釈を加えた別稿安部（2014.3）を予定しているので、必要に応じてそちらも参照していただければ幸いである。

2　日本語「南北型方言分布」の諸相

2—1 「南北型方言分布」と「南北方言境界線」

この「南北型方言分布」は、日本語の方言の分布パタンを主に地理言語学的観点から類型的に把握した場合の分布類型の 1 パタンである。その地理的範囲と境界は、どの方言現象を優先的に考慮するかによって多少の南北間の幅があるが、基本的には図 I に示した境界線（境界帯）によって南北に区切られる。

日本列島の本州から九州にかけて、およそ中心線から南北に 2 分した場合、北方（主に日本海側）ないし南方（主に太平洋側）に偏る方言の特徴、あるいは、その分布パタンを指す（東北の太平洋側は北方に属するパタンになることが多い)。

従来、「表日本（型）方言」「裏日本（型）方言」とも呼ばれたもので、南北で対になっている現象もあれば、どちらか片側だけの分布であるもの（例えば風向名「アユノカゼ」等）も、従来から含めて扱われてきている。この分布類型は、柴田武が「霜焼け」の分布で最初に指摘したものである。

なお、南・北に偏在するという特徴的パタンをもっているこの「南北型方言分布」の境界線の名称は、分布パタンの 1 つである「東西型方言分布」がもつ「糸魚川・浜名湖方言境界線」と同じような名付けの 1 つとして、安部（1999）以降、「気候（境界）線」あるいは「南北気候境界線」と呼んできたものでもあったが、日本列島上の地理的位置関係がわかりやすい名称として、「南北方言境界線」（別称として「気候境界線」）を使用している（経緯は安部 2013.2 参照)。

2―2 「南北型方言分布」リスト一覧（2013 年 10 月時点）

まず、南北方言境界線をもつと考えられた方言現象を次に列挙しておく。

項目毎の最後の研究者氏名・発表年や文献名は、その分布を最初に指摘したもの、あるいは、分布データ（地図・文献）を掲載する資料（その刊行年など）である。なお、分布地域の南北を、記号▲▼により、いわゆる裏日本側▲（北方）・表日本側▼（南方）として示す。各分布図は、後掲の図①～㉕を参照。

□語彙（特に寒冷気候に関わる傾向）

①▲シモヤケ（LAJ127 図「しもやけ（凍傷）」）（柴田武 1963）

②▲無回答・タツマキ（LAJ264 図「つむじ風」）（真田信治 1979）

③▲ノリツケホーセー・ノリツケホーソー（『日本言語地図』LAJ298・299 図「梟の鳴き声」）（佐藤亮一 1986）

④▲シミル（LAJ97 図「（手拭いが）凍る」）（加藤正信 1995）

⑤▲「シバレル（凍）」（『日本方言大辞典』での使用地域により安部作図）

⑥▲「フキ（吹雪）」（安部 2001.3・安部 2007.3、『日本方言大辞典』での使用地域により安部作図）

⑦▲「シガ・スガ（氷・氷柱）」（LAJ261・262 図「氷」「氷柱（つらら）」による）

⑧▲風向名「アユの風」（室山敏昭 2001 他）

⑨▲地名「溜池を表す『～堤』」（鏡味明克 1984）

⑩▲地名「アラマチ（荒町）」（＜新町）（鏡味明克 1984）

⑪▲▼えらび歌の歌詞「神様―天の神様」（石井聖乃 2003）「えらび歌の地域差に関する調査研究（研究ノート）」

⑫▲感動詞「サーサ・サイ」（澤村美幸 2011）『日本語方言形成論の視点』

語彙追加図　「糸」「木綿糸」におけるカナ　（LAJ153 図・156 図より）

□音声（唇音化、口蓋化、喉頭化等の音声現象に関わる事例が多い）

⑬▲▼「ボウ（追う）」（LAJ147・189 図）（唇音 bo―母音 o）（唇音化）（安部 2008.3）

⑭▲▼地名分布「bu―u 対応（Budo 葡萄―udo・uto 宇藤・宇都）」（唇音 bu―母音 u）（唇音化）（安部 2008.3）

⑮▲▼「キツ―ヒツ（櫃）」の「＊kw―p 対応」（唇音化、喉頭化）（安部 2009.3）

⑯▲▼「『酸っぱい』のスッカイ―スッパイ」の「＊kw―p 対応」（LAJ41 図）（唇音化、喉頭化）（安部 2009.3）

⑰▲▼「かかと（踵）のアクド対ア（フ）ド）」の「＊kw―p 対応」（LAJ129 図）（唇音化、喉頭化）（安部 2009.3）

⑱▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化（ヒェ・ヘ）」の分布」（口蓋化）（地図は「日本方言音韻総覧」掲載）

⑲▲▼「u<i（フガシ（東）・フゲ（髭）」の分布（LAJ11・12 図）（i の口蓋化）（鏡味明克 1984）

⑳▲▼「四つ仮名」における「一つ仮名地域／zi／」とそれ以外の地域（口蓋化）（地図は「日本方言音韻総覧」掲載）

音韻追加図　開合の残存における母音の広狭の南北差

□アクセント

㉑▲▼「アクセントが母音の広狭により変化する地域▲&変化しない地域▼」（口蓋性・唇音性？）（分布図は真田信治 1989）

□文法（現時点では「aru 型動詞」の残存という傾向が強い）

㉒▲「ネマル」の分布（LAJ51・52 図「座る」「あぐら（胡座）をかく」（安部 1999）

㉓▲「オガル（生育）」の分布（＜生ふ）（『日本方言大辞典』の地域による、安部 2007.3a）

㉔▲地名分布「カクマ」（かくまる（囲））（＜囲む）（○鏡味完二 1958）

㉕▼「下二段（語幹開音節）動詞の優勢残存」（○平山輝男 1984 の図、安部 2008.3 指摘）

安部（1999.9）で最初に提示したこの南北方言境界線は、下記の①―④と㉒の 5 つであった。このうち、㉒のネマルについては、その時点では、気候の影響が明確であった他の分布例と同様に扱えるか判断を保留していたものであった。その後の検討から、古代動詞派生語形［―aru 型］の残存分布パタン」という現象の 1 つとして位置付けられた（安部 2008.3）。その類似例として、さらにオガル・カクマを追加することができる。

上記の⑤以降は、その後の考察（安部 2007.3 科学研究費報告書（⑤～⑩）、小林隆氏科学研究費研究会、安部 2006.3、安部 2008.3、安部 2013.2 など）によって現在まで追加されたものである。項目毎に付した研究者氏名・発表年や文献名は、その分布を最初に指摘した研究（◇）か、今回掲載した言語分布データ（地図・文献）を掲載する研究等（○）を示すための簡略な典拠情報である。

2―3 「南北型方言分布」の諸特徴――通時的特徴・類型的特徴――

安部（2013.2）において、「南北型方言分布」の諸特徴を略説したが、この分布パタンには、柴田武（1963）が指摘した地理的偏在以外の特徴が確認できる。

すでによく知られている次の 2 つの分布パタン――Ⅰ「東西型方言分布」、および、Ⅱ周圏型（ABA 型）である「外輪方言 VS〔中輪＋内輪〕型方言」――には、それぞれの対比される地域間において、従来、次のⅠ・Ⅱのような全体的総合的対立特徴が指摘され、議論されてきた。

Ⅰ　「東西型方言分布」＝＝いわゆる《子音性優位 VS 母音性優位》（馬瀬良雄（1992）、安部（1999.5）参照）

Ⅱ　周圏型の 1 つである「外輪方言 VS〔中輪＋内輪〕型方言」＝＝

《総合的 VS 分析的弁別的》（安部（2002）ほか参照）

Ⅲ 「南北型方言分布」＝＝《北方地域における〔寒冷環境への馴化に伴う〕発音・意味の有標化、文法における古い特徴の南北での残存》

この「南北型方言分布」の全体的特徴としては、現時点では、特に音声と語彙（意味）の側面におけるⅢの特徴を指摘できる。

安部（2013.2）において諸特徴を概説したが、本稿のための予備知識として、その南北の特徴に関する部分を補筆しつつ紹介しておく。

［**通時的・共時的特徴**］（**安部 2013.2 への補筆あり**）

提示してある具体的分布事例から見て、南北差の形成には、次ような史的形成過程が想定される（該当事例については後掲地図参照）。

ア　もとから南北の一方の地域のみの言語現象である場合（③「梟の鳴き声」）

イ　もとは南北差がなく全国共通にあった言語事象が、片方では消滅ないし衰退して一方にのみ残存した場合

ウ　本来南北共通にあった言語事象が、片方で独自の形態や意味など別の言語事象を形成した場合（④「（手拭いが凍る）シミル」「ボウ（追う）」）

エ　来同じ起源の言語事象が、南北での地域的条件に合わせてそれぞれ独自の言語現象を形成した場合（「キツ―ヒツ（櫃）」）

オ　一方の地域のごく一部の現象だったものが後に拡大し、片方の地域のみに均質的に分布した場合（風名「あゆ（の風）」等）

カ　その他の場合

分布特徴を集約して南北各々における種々の方言現象相互を関連付けて類型化し「北方式」「南方式」とでも呼べるような、一定の共通性や法則などの規則性は、語彙（意味）と音声（発音・発声）に指摘できる。下二段活用動詞の残存も、開音節語幹動詞の残存とみられるので、そのような

音声現象の１つと認められる。

ただし、その事例は、上記Ⅰ・Ⅱの分布パタン類型に所属する言語現象に比せばまだ多くはなく（多くないのは、Ⅰ・Ⅱよりも形成年代が古い分布パタンであるため、と解釈可能であるが）、また、今後の検討が必要な地図も少なくない。

この分布パタンの研究史が新しいこともあり、Ⅰにおける所謂「子音性優位―母音性優位」、Ⅱにおける「総合的―分析的弁別的」のように（これらの解釈にも諸説ある）、音韻・文法・語彙全体に共通するような特徴が、一定の定説としてある研究段階には至っていない（「南北型」の語彙における北方の「寒冷地特有現象」のみは定説）。

史的解釈に関する部分では、柴田武の指摘以後の類型事例の追加と形成要因の学際的な研究によって、従来課題であった東北方言と出雲方言の共通性・類似性の多くは、この「北方方言」としての歴史的連続性に起因することがほぼ解明された。また、それによって、東北北陸出雲という北日本方言のすべてが南日本方言より古いとは必ずしも限定できないこと（前後関係が逆である場合や同時的分化の可能性など）なども明らかになってきている（安部清哉 2008.3 参照）。

［南北型分布事象の類型的特徴］（安部 2013.2 への補筆あり）

これらの南北分布にある程度の類型的傾向が指摘できる。

○語彙では、多くは寒冷地特有の現象として、北日本に偏る。

○文法では、古態の文法現象の残存として、南・北それぞれ個別に見られる。

○音韻では、多く南・北での音声的対立として、南北対になった対応現象が認められる。

なお、初期の南北方言研究ではじめに指摘された語彙においては、①～④は寒冷・多積雪・長期的根雪地帯という気候特性に起因する現象として個々には説明されてきた。さらに、⑥「フキ（吹雪）」⑦「氷（柱）」や①「ユキヤケ」には認知論的な類型も認められ、語彙の場合、いわゆる単な

る「雪国の単語」というだけでなく、南方地域にもある同じ語源の語（語形）が、北日本において、「寒冷地特有の事物・現象への意味的有標化」をなす、という興味深い傾向が認められる（安部 2004）。

例えば、次のような共通パタンを示している。（／の後者が北での意味、カタカナは方言語形）

○フキ（吹き）〔風／吹雪〕

○ユキヤケ（雪焼け）〔日焼け／凍傷（霜焼）〕

○サワ（沢）・スガ・シガ（氷）（これらは「水・川」の意の同源）〔川・沼沢／氷・氷柱〕

いずれも、南方側で「風」「日焼け」「川・沼沢」を表す語形（現在の共通語における意味）が、北方で寒冷地に特徴的意味（吹雪、霜焼、氷）に有標化していることがわかる。

またそれ以外にも、語彙では、南北での文化的特性の相違と推定される対立事例（⑩荒町―新町、⑪神様―天の神様などの南北での相違）もうかがえるが、まだ事例が少ないので今後の検討課題である。

音韻の傾向としては、おおよそ「唇音化・円唇化、喉頭化、口蓋化」等発音に関わるという共通性が認められる。それは、古い日本語の特徴に共通するような傾向とも見られる点で興味深い。

文法では、文法現象として類型化させれば、「下二段動詞の残存」と「aru 型動詞の残存」の 2 パタンしかまだない。しかし、前者はいわゆる「語幹開音節動詞」の南方での優勢残存ととらえられ、後者も上代（以前）の古代語において生産性が高かったアルの用法が強く残存している地域と解釈することができるなら（安部 2008.3）、いずれも、「日本語文法の古態をとどめる（とどめやすい）分布パタン」という解釈もできるように思われる。類型を考察するためにも、文法の分布事例の収集は今後の課題でもある。

これまで指摘された該当候補現象が少なかったので、東西対立や ABA 分布等の類型パタンに比べ研究が遅れていたが、これらの新たな言語地図

の提示によって、今後の総合的研究が期待される。

3 「南北型方言分布」の言語地図一覧（後掲地図参照）

2章で「南北型方言分布」と考えられる言語現象一覧を提示した。当該地図については、本文の後、参考文献の前に一括掲載する。また、関連する地図についても、下位番号を付して併載しておく（例：図⑦—2）。

当該分布地図として図を掲載するのが初めてのものもあるので、いくつかの図について、出典、該当語形およびその分布特徴、境界線の位置ほかについて、若干の解説を付しておくことにする。なお、既によく知られているもの（①～④）や、安部（1999.9）で取り上げたものなどでは、解説の記載を略した場合がある。

3—1　語彙における南北方言　（各分布図は、後掲の図①～㉕を参照）

3—1—1　南北分布の語彙

□語彙（特に寒冷気候に関わる傾向）（LAJ は『日本言語地図』、GAJ は『方言文法全国地図』）

①▲シモヤケ（LAJ127 図「しもやけ（凍傷）」）（◇柴田武 1963）

②▲無回答・タツマキ（LAJ264 図「つむじ風」）（◇真田信治 1979）

③▲ノリツケホーセー・ノリツケホーソー（LAJ298・299 図「梟の鳴き声」）（◇佐藤亮一 1986）

④▲シミル（LAJ97 図「（手拭いが）凍る」）（◇加藤正信 1995）

これら①～④については、安部（1999.9）を参照されたい。なお、②の「無回答・タツマキ」の分布南限線の解釈については、より厳密に「無回答およびタツマキとの分布地点が隣接している地域まで」と再解釈し、LAJ264 図「つむじ風」に再確認して、特に九州での境界部分を修正している（安部（2013.2）。その修正版の境界線も掲載しておいた。

⑤▲「シバレル（凍）」（『日本方言大辞典』での使用地域により安部作図）

⑥▲「フキ（吹雪）」（◇安部（2001.3）・安部（2007.3）、『日本方言大辞典』での使用地域により安部作図）

共に、『日本方言大辞典』に掲載されている分布地域によって解釈し、その地域を地図化したものである。

⑤「シバレル（凍）」は、これまでも北海道や北東北などに特徴的語形として紹介はされてきたが、特徴的偏りをあえて地図化することはなく、また、分布地域を提示した研究も管見の限り見られないようであるので今回掲載しておく。⑥「フキ（吹雪）」は安部（2001.3）および安部（2007.3）による。

⑦▲「シガ・スガ（氷・氷柱）」（◇安部（2004.12）、○ LAJ261 図「氷」・LAJ262 図「氷柱（つらら）」による）

⑦の氷および氷柱（つらら）は水に関わる現象であるが、語形「シガ・スガ」は、日本語の河川地形名システムにおいて、「サワ（沢）」と同源（諏訪湖の「スワ」も）と解釈できる水源関係語彙の 1 つである。河川地形名、サワ（古語サハ）も東日本に偏るが、シガ・スガはそれらの同語源が特に北方寒冷地において、寒冷地特有の現象に有標化されて、「氷った水」としての氷・氷柱を表す語形に特定されたと解釈される。サワとスガ・シガなどについては、安部（2004.7）、あべせいや（2004.12）を参照されたい。

なお、「氷」「氷柱」における該当語形としては、次の語形も対象として考慮した。

「氷」――スガ（マ）、シガ（マ）、シミ、これらの転倒語形と解釈し得るガサ・ガスも加えた。

「氷柱」――スガ（マ）、シガ（マ）、スガンボー、スゴ（―）リ、スグリンボーなど。

⑧▲風向名「アユの風」（○真田信治（1989）図、室山敏昭（2001）他も参照）

風向名「アユノカゼ」が日本海側に偏在することの指摘はかなり古いが、最初の指摘は未詳である。今回の掲載地図は、見やすさを考慮し、真田信治（1989）によった。「アユノカゼ」に関する新しい考究として室山敏昭（2001）がある。

⑨▲地名「溜池を表す『～堤』」（◇鏡味明克 1984・1985）

⑩▲▼地名「アラマチ（荒町）」（＜新町）（◇鏡味明克 1984・1985）

共に、地名として鏡味明克（1984・1985）の研究に見出されたものである。⑩の「アラマチ」（荒町）はおそらく「新町」と対応しているものと考えられる。新規に開発・開拓された地域名としての「新町」が、寒冷な北方地方では、おそらくまだ十分に整備されていない荒涼とした場所にできた地域「荒れた町」として、認知されたことによるか、という民俗学的な解釈もできなくはないが、類似方言例や、類似の民俗学的現象を見出して比較検証するなど、今後の検討を要する。

関連して、地名「～軒（茶）屋」（鏡味明克 1985）について触れておく。

鏡味明克氏から、鏡味明克（1985）に、気候線と同様の位置に境界をもつ地名として「～軒（茶）屋」の一連の分布があることを、私信にてご教示いただいた。「～」のところには数字が入り、「一」からいくつかのバリエーションがある。「～ツ屋」との分布境界がいわゆる太平洋側対日本海側にあたるような対照的分布をなしている。「～軒（茶）屋」の方が新しい分布で、東の「～ツ屋」の領域に、しだいに東進してきたことによって形成されたもののように見える。「～軒（茶）屋」が漢字音語形でもあり比較的近年のものと思われたこと、語形（数字の違い）によって多少境界線の出入りが見られること（東西分布とも紛れる）、今回は参考として紹介するに留める。ご助言くださった鏡味氏に深謝申し上げます。

⑪▲▼えらび歌の歌詞「神様―天の神様」（◇石井聖乃 2003）――「えらび歌の地域差に関する調査研究（研究ノート）」『東京女子大学言語文化研究』12）

⑪「選び歌」（全国的に見られる“どちらにしようかな～神様の言う通り”の唱え唄）の歌詞において、「神様（の言う通り）」か「天の神様」かの相違が、南北で綺麗な相補分布をなしているのが見てとれる。石井聖乃（2003）では、これを南北分布とは解釈していないが、興味深い対応である。「天の～」の方が「天にまします我らが～」のような感覚に通じ、新しいもののようにも思われる。現時点では、対比的相違の文化的理由をただちに断定しがたく、⑩の「荒町―新町」における南北の対応とも何らかのところで関わっていそうであり、日本文化における南北の民俗学的認識やその気質の相違を投影している可能性もある。

⑫▲感動詞「サーサ・サイ」（◇澤村美幸（2011）『日本語方言形成論の視点』岩波書店）

⑫はもっとも新しく見出した分布地図であり、感動詞の「サーサ、サイ」類が明らかに北方に偏っている。古い囃子詞に由来する語形とも見られ、古態を留めるものかどうかなど今後の考察を期する。

3―2　音韻における南北方言境界線

3―2―1　南北分布の音韻　概観

□音声（唇音化、口蓋化、喉頭化等の音声現象に関わる事例が多い）

音声関係は、現時点では、A 唇音化に関わるもの、B 口蓋化に関わるものに 2 分される。さらに、A 唇音に関わるものは、A―a「母音の b 音化（破裂化）」と、A―b「k（kw）―p 対応」とに 2 分類される。アクセントについては未詳であるが、音声の方の特徴のいずれか、ないし、いずれにも関わっている可能性が疑われる。

A　唇音化現象関係と解釈できるもの

A—a「母音の b 音化（破裂化）」

⑬▲▼「ボウ（追う）」（LAJ147・189 図）（唇音 bo—母音 o）（唇音化）（◇安部 2008.3）

⑭▲▼地名分布「bu—u 対応（Budo 葡萄—udo・uto 宇藤・宇都）」（唇音 bu—母音 u）（唇音化）（◇安部 2008.3）

A—b「k（kw）—p 対応」

⑮▲▼「キツ—ヒツ（櫃）」の「＊kw—p 対応」（唇音化、喉頭化）（◇安部 2009.3）

⑯▲▼「『酸っぱい』のスッカイ—スッパイ」の「＊kw—p 対応」（LAJ41 図）（唇音化、喉頭化）（◇安部 2009.3）

⑰▲▼「かかと（踵）のアクド対ア（フ）ド）」の「＊kw—p 対応」（LAJ129 図）（唇音化、喉頭化）（◇安部 2009.3）

B　口蓋化現象関係と解釈できるもの

⑱▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化（ヒェ・ヘ）」の分布」（口蓋化）（○「日本方言音韻総覧」掲載図より。◇安部 2013.2）

⑲▲▼「u<i（フガシ（東）・フゲ（髭）」の分布（LAJ11・12 図）（i の口蓋化）（◇鏡味明克 1984）

⑳▲▼「四つ仮名」における「一つ仮名地域／zi／」とそれ以外の地域（口蓋化）（○「日本方言音韻総覧」掲載図より。安部 2013.2）

母音 i、e、あるいは、それらの口蓋化に関わる点で相互に関連するものか。今後の検討課題である。

□アクセント

㉑▲▼「アクセントが母音の広狭により変化する地域（▲）＆変化しない地域（▼）」（○真田信治（1989）より）

北方の特徴が、南方の房総半島と徳島に分布がある点が検討課題である。

房総半島については、『古語拾遺』他に記録があるように、阿波忌部氏（徳島阿波）から安房（千葉県）に忌部氏の一部が分かれるなど、房総への歴史的な移住が認められる。

アクセントについては、上記の音声現象も考慮した考察が今後必要と思われるが後考を期したい。

3―3　文法における南北方言境界線

3―3―1　南北分布の文法　概観

□文法（現時点では「aru 型動詞」の残存という傾向が強い）

文法では、類型化させれば、「下二段動詞の残存」と「aru 型動詞の残存」の 2 パタンしかまだ見出せない。

㉒▲「ネマル」の分布（LAJ51 図「座る」・図 52「あぐら（胡座）をかく」（◇安部 1999.9）

㉓▲「オガル（生育）」の分布（＜生ふ）（『日本方言大辞典』の地域により地図化、◇安部 2013.2）

㉔▲地名分布「カクマ」（かくまる（囲））（＜囲む）（〇鏡味完二 1958、◇安部 2013.2）

㉒㉓㉔は、上代（以前）の古代語において生産性が高かったアル（アリ）の用法が強く残存している地域と解釈することができる（安部 2008.3）。

㉕▼「下二段（語幹開音節）動詞の優勢残存」（〇平山輝男 1984 の図、◇安部 2008.3）

㉕は、いわゆる「語幹開音節動詞」の南方での優勢残存ととらえられる。

いずれも、「日本語文法の古態をとどめる（とどめやすい）分布パタン」とも解釈できようか。類型を考察するためにも、文法の分布事例の収集は今後の課題でもある。

4　むすびとして

本稿では、「南北型方言分布」に関する一連の研究の続編として、安部（1999.9）の 5 本以降に見出した 20 図を加えた、計 25 図の言語地図の全体（現時点での該当現象）をはじめて提示した。（初校時、語彙に 1 図、音韻に 1 図各々の最後に追加し、計 27 項目とした）

該当すると考えられる現象を共有し研究を広く進めていくために一括して掲載し、その出典、該当語形とその分布特徴、境界線の位置ほかについて、若干の補足情報を付したものである。

該当する地図を一覧できるようにすることで、新たに共通する特徴を見出せるようになる。例えば，尾張・三河地方付近には、北方の方言現象が見られることがあり（⑥⑬⑭⑰）、この地方の独特の文化と考え合せると示唆的である。

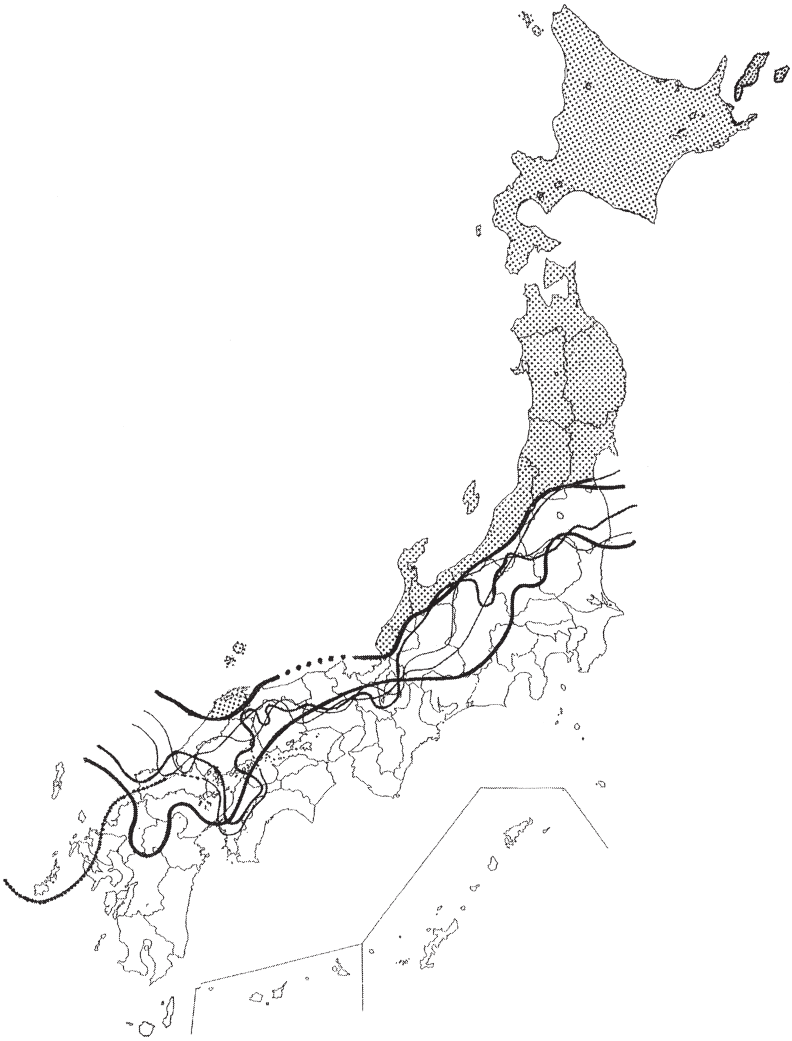
個別には、すでに詳しく論じているものもあるが（安部の 2009.3、2011.3、2012.3 ほか参照）、新しい解釈としては、安部（2014.3 予定稿）をあわせてご参照いただければ幸いである。

図 A・図 B として示した東アジアの方言境界線、および、インド・ヨーロッパ語族の二大分派＝Centum-Satem の語派（方言）境界線も、ともに、同じ条件をもつ気候の境界線（冬期寒冷月平均気温摂氏 0 度境界線）と併行しているものであり、図 A・図 B の境界線は言語境界線としても同質のものと考えられる（安部（2013.3））。

その点でも、本稿で示した日本語の南北型方言の個々の地図の地理言語学的解釈は、東アジアの言語・文化、および、ヨーロッパ大陸のインド・ヨーロッパ語および欧州文化の比較言語研究、比較文化論的研究のための、基礎的一階梯となるものと考える。

日本語の「南北型方言分布」を含むこれらの言語分布の解釈については、引き続き考察を継続していきたい。

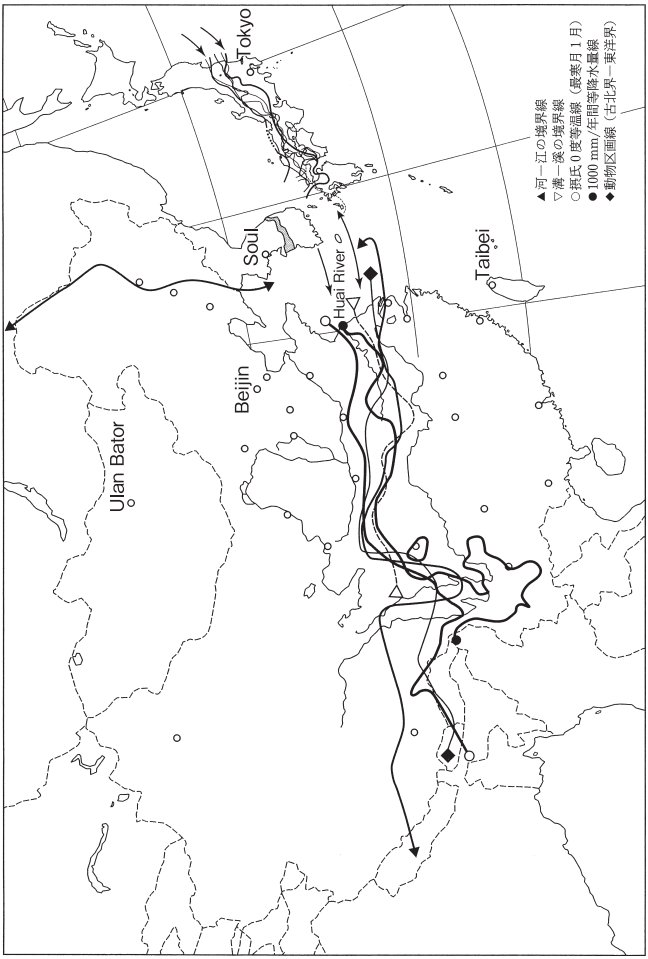
【以下に、図Ⅰ・Ⅱ、図Ａ・Ｂ、図①～㉕、参考文献の順で掲載する。】



図Ⅰ　南北型方言分布境界線

（2013 補正版＝九州の点線は「旋風」の補正線）

図 II 「南北型方言分布境界線」総合図　安部清哉（1999）



図Ａ　アジアにおける言語・文化・気候の複合境界線（安部）

Figure A. Composite borders of languages, culture and climate in Asian region（ABE2013）

▲―▲ North-south dividing line for the use of “he 河” and “jiang 江” in river names of China
▽―▽ North-south dividing line for the use of “xi（chi）溪” and “gou（kou）溝” in river names of China
○―○ Isothermal line at 0 Degrees Celsius（coldest month: January）
●―● Isohyetal line at 1000 mm per year
◆―◆ Faunal realm（palaearctic realm-oriental realm）

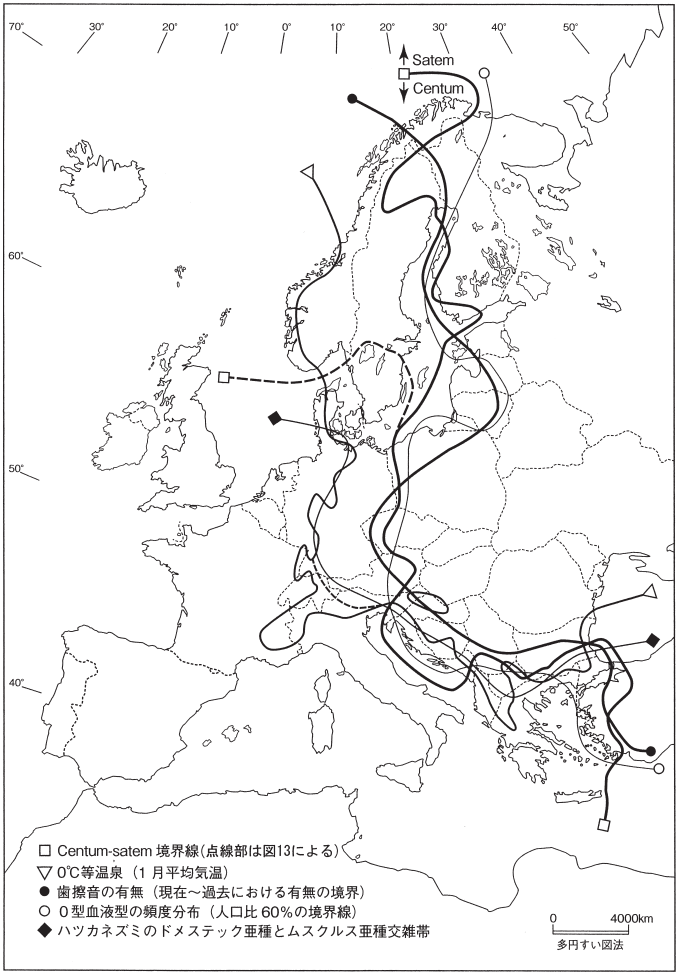
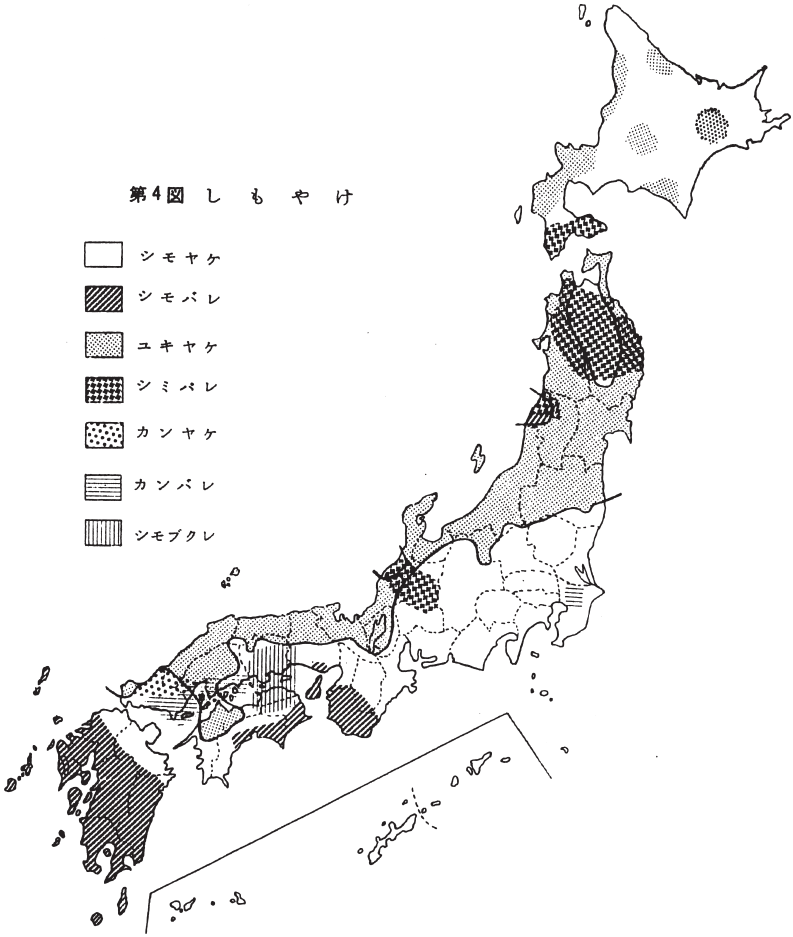


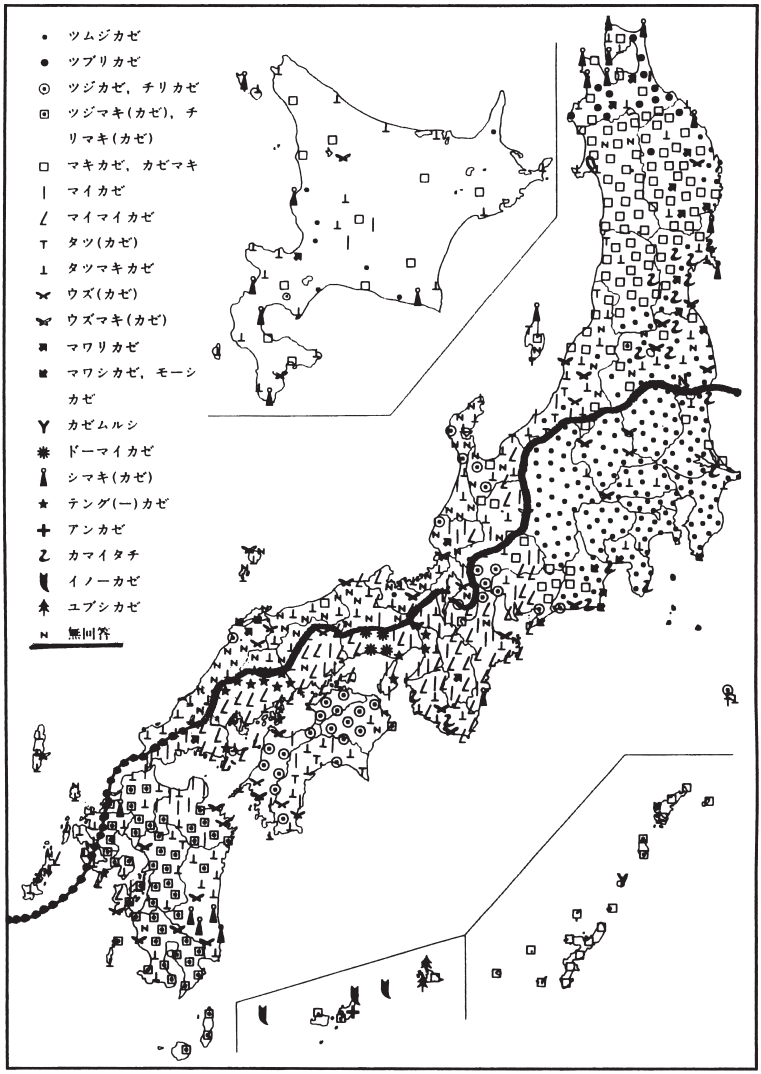
図 B　ヨーロッパにおける言語・文化・気候の複合境界線（安部）

Figure B. Composite borders of languages, culture and climate in Europe (ABE2013)

□—□ Centum-Satem border (dotted line is the border with a different interpretation)
▽—▽ Isothermal line at 0 Degrees Celsius (coldest month: January)
●—● Presence of sibilance (the boundary lines of the presence current and past)
○—○ Distribution boundaries of blood type O in 60% of population
◆—◆ Hybridization zone of Mus musculus domesticus and Mus musculus musculus



図①　▲「シモヤケ（霜焼）」（LAJ127 図「しもやけ（凍傷）」）（柴田武 1963）

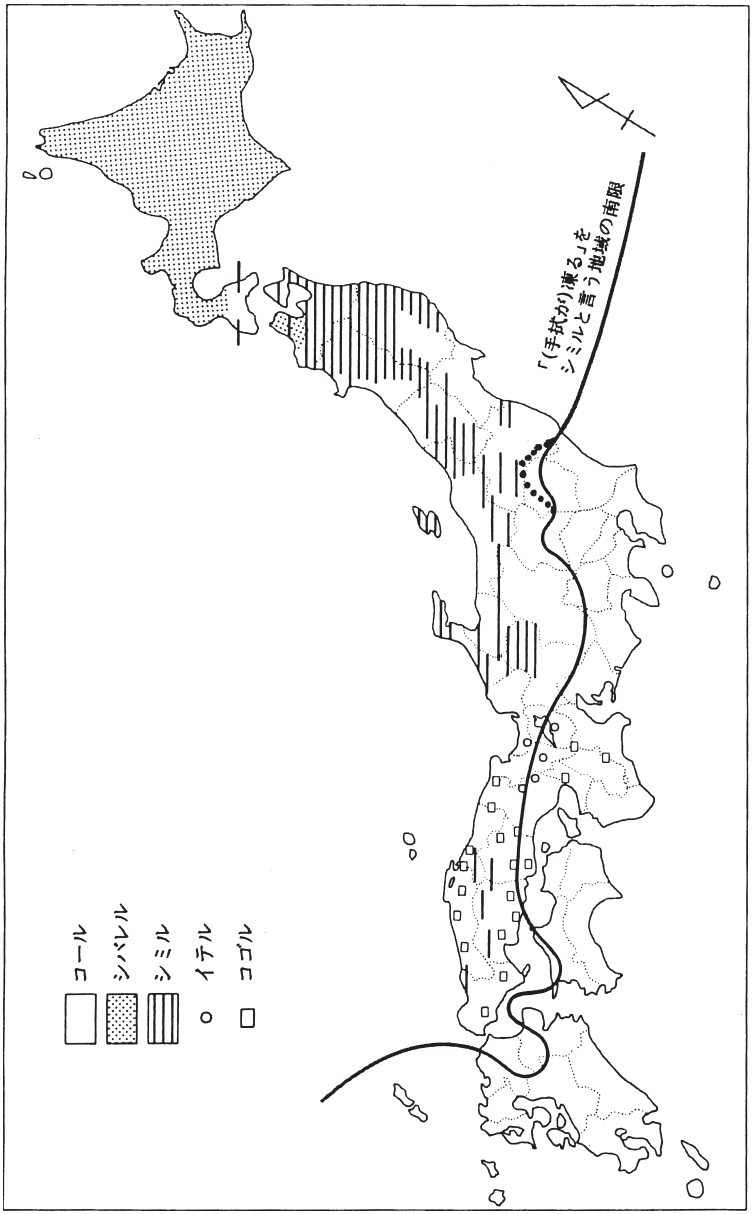


「無回答」及び「タツマキ」の回答が、隣接しつつ連続して分布する地域の南側の境界を描いたもの。簡略図は、佐藤亮一（1991）による。

図②　▲「タツマキ・無回答」〔代用回答〕（LAJ264 図「つむじ風」）（真田信治 1979）

○印は境界線の南側の分布地点を示す

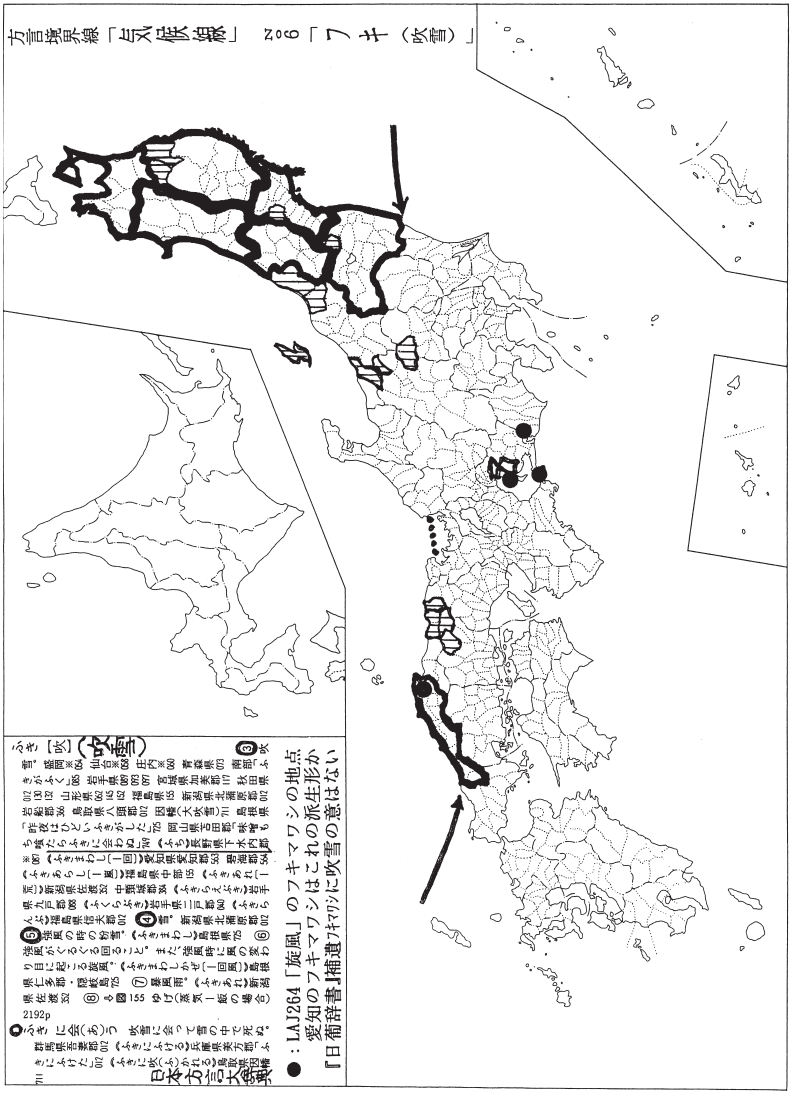
図③　▲「ノリツケホーセー・ノリツケホーソー」（LAJ298・299 図「梟の鳴き声」）（佐藤亮一 1986）



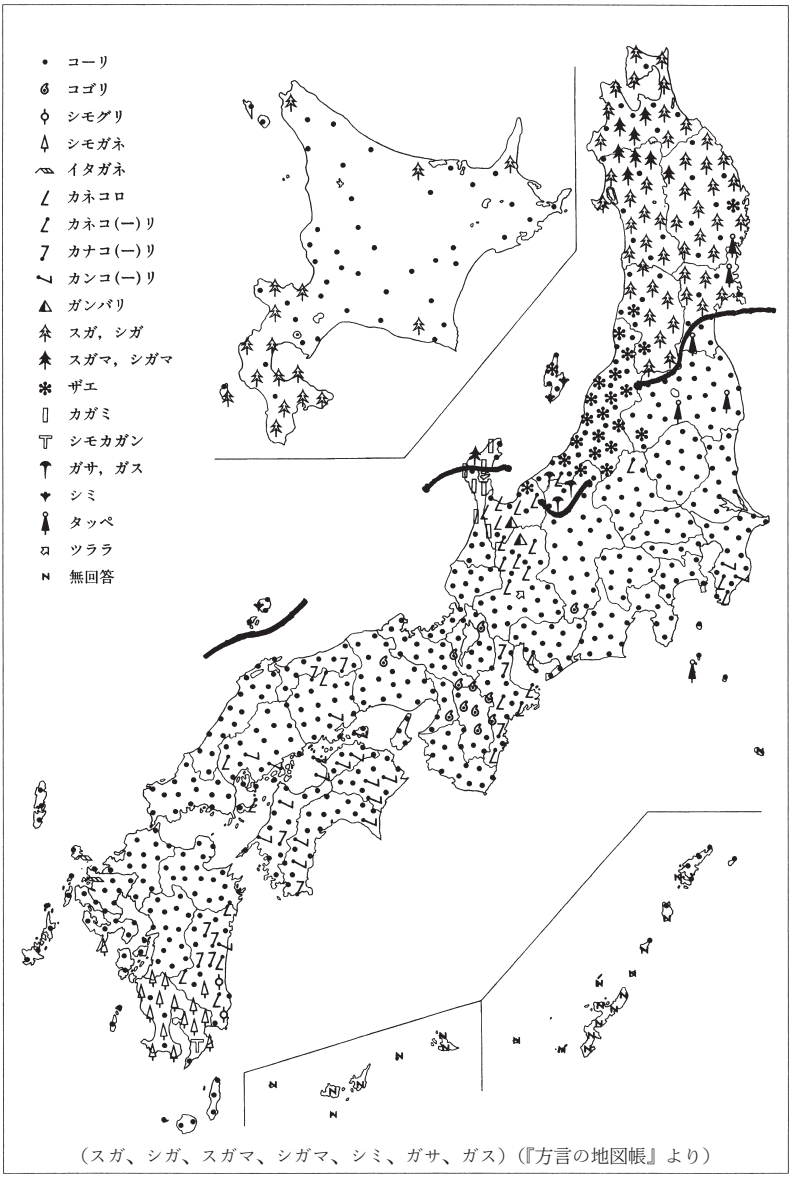
出典：『日本言語地図』第２集（1968）、96 図、97 図による。……は安部の補正線

図④　▲「シミル（凍）」（LAJ97 図「（手拭いが）凍る」）（加藤正信 1995）

図⑤　▲「シバレル（凍）」（『日本方言大辞典』での使用地域により安部作図）



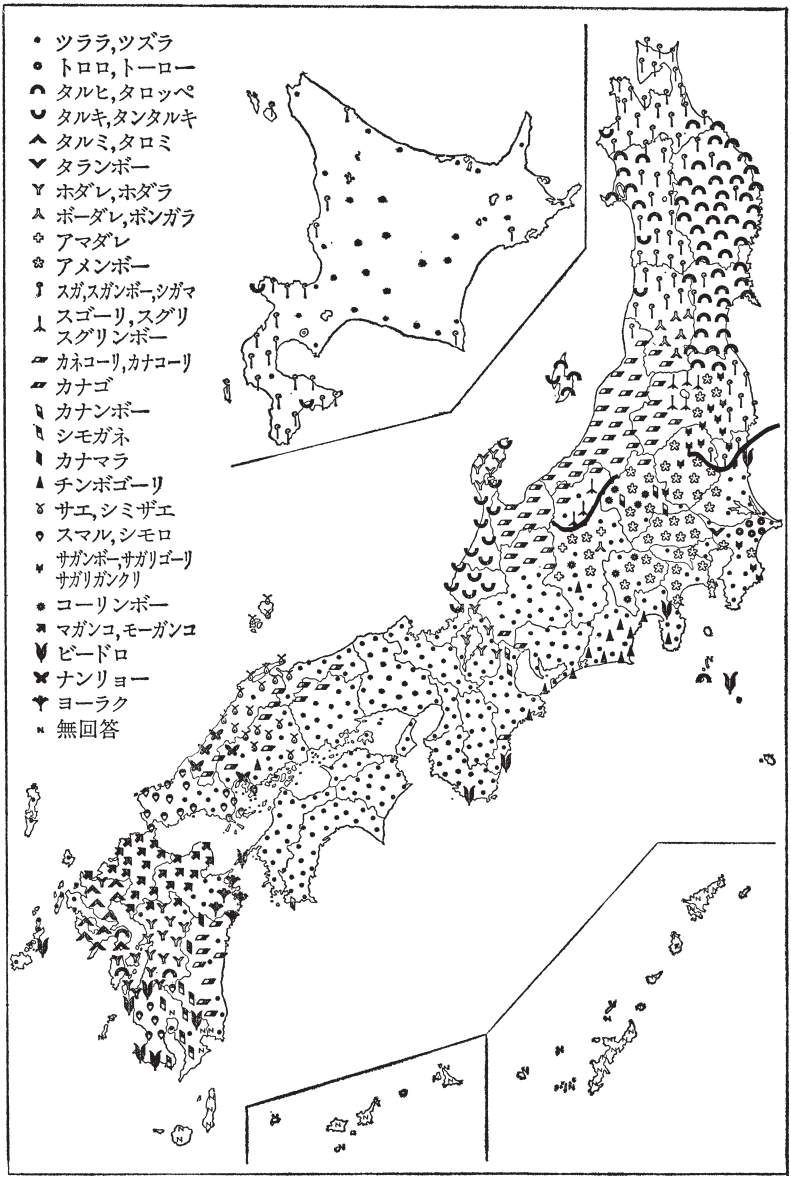
図⑥　▲「フキ（吹雪）」（◇安部（2001.3）・安部（2007.3）、『日本方言大辞典』での使用地域により安部作図）



（スガ、シガ、スガマ、シガマ、シミ、ガサ、ガス）（『方言の地図帳』より）

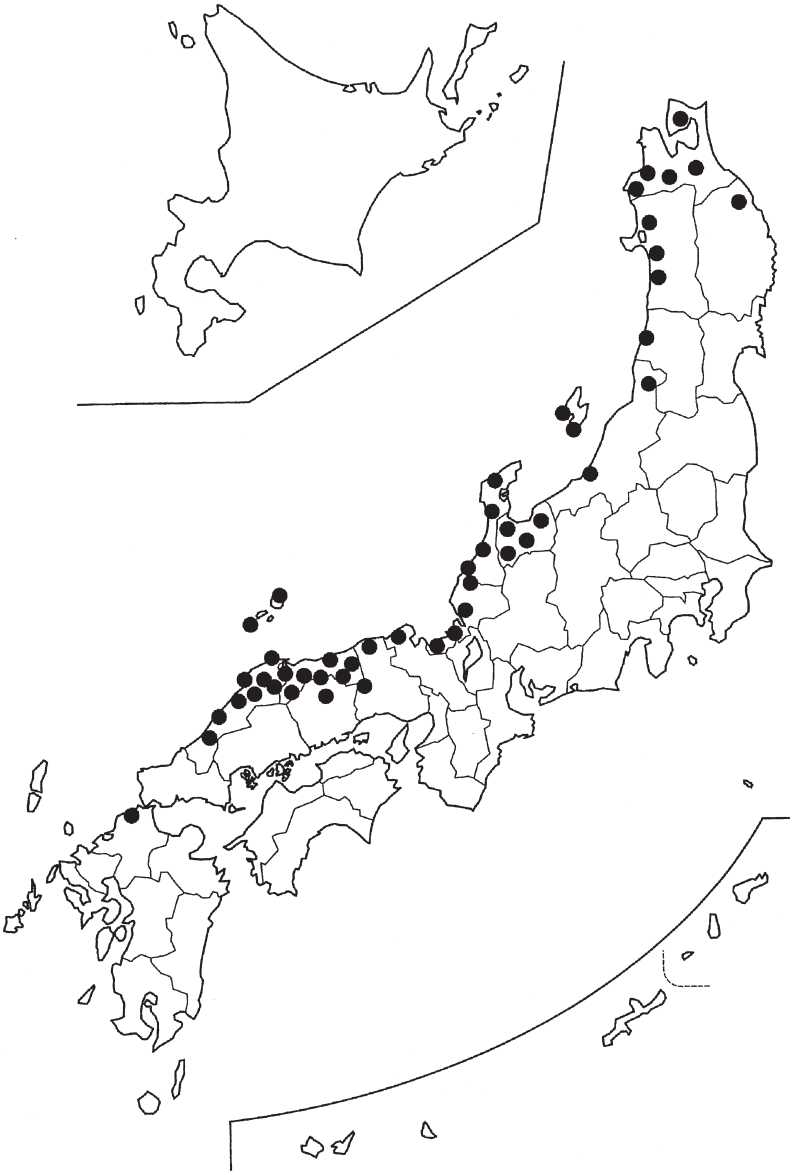
図⑦–1 「シガ・スガ」（氷）

図⑦ ▲「シガ・スガ（氷・氷柱）」（LAJ261・262図「氷」「氷柱（つらら）」）

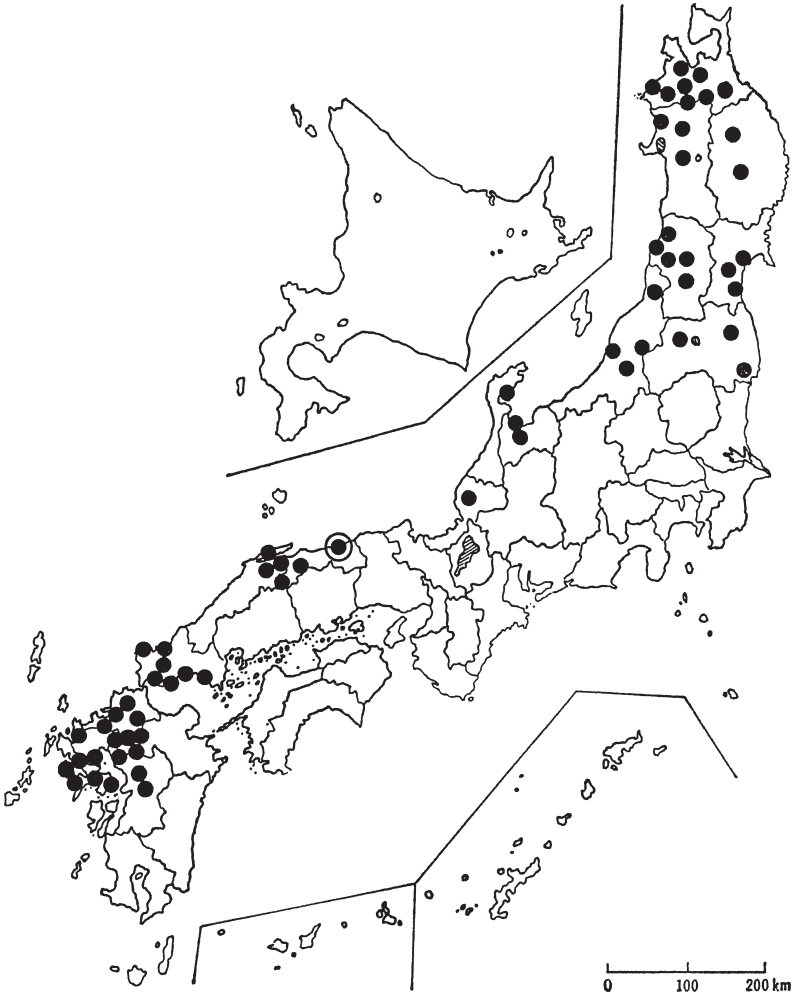


（スガ、スガンボー、シガマ、スゴーリ、スグリ、スグリンボー、など）（『日本の方言地図』より）

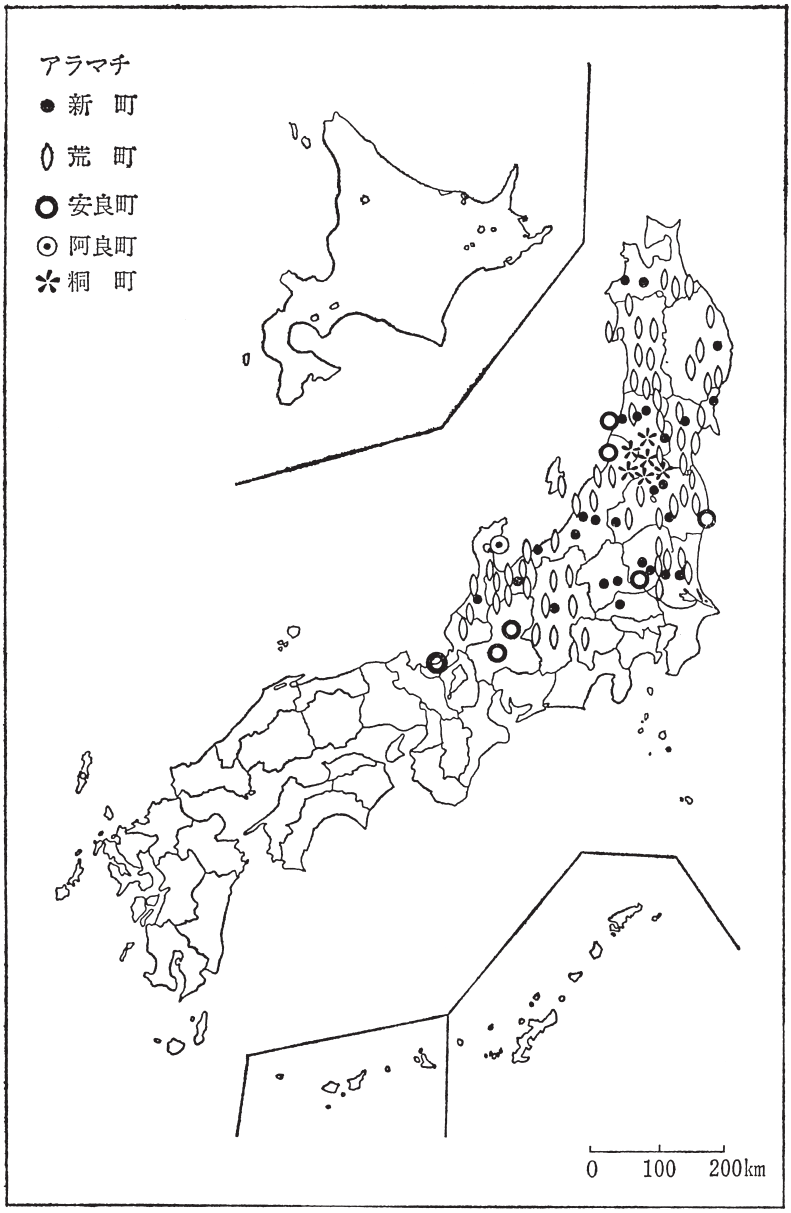
図⑦-2 「シガ・スガ」（氷柱）



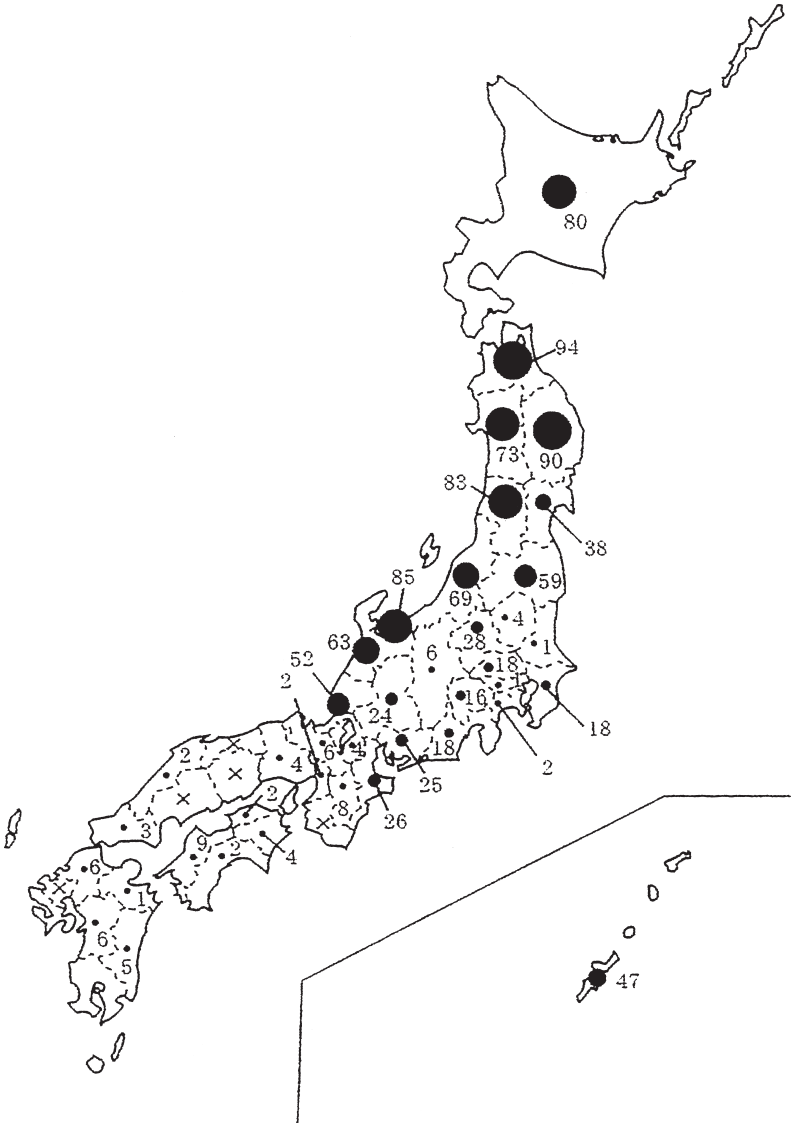
図⑧　▲風向名「アユの風」（真田信治 1989 での掲載図より）



図⑨　▲地名「溜池を表す『～堤』」（鏡味明克 1984）

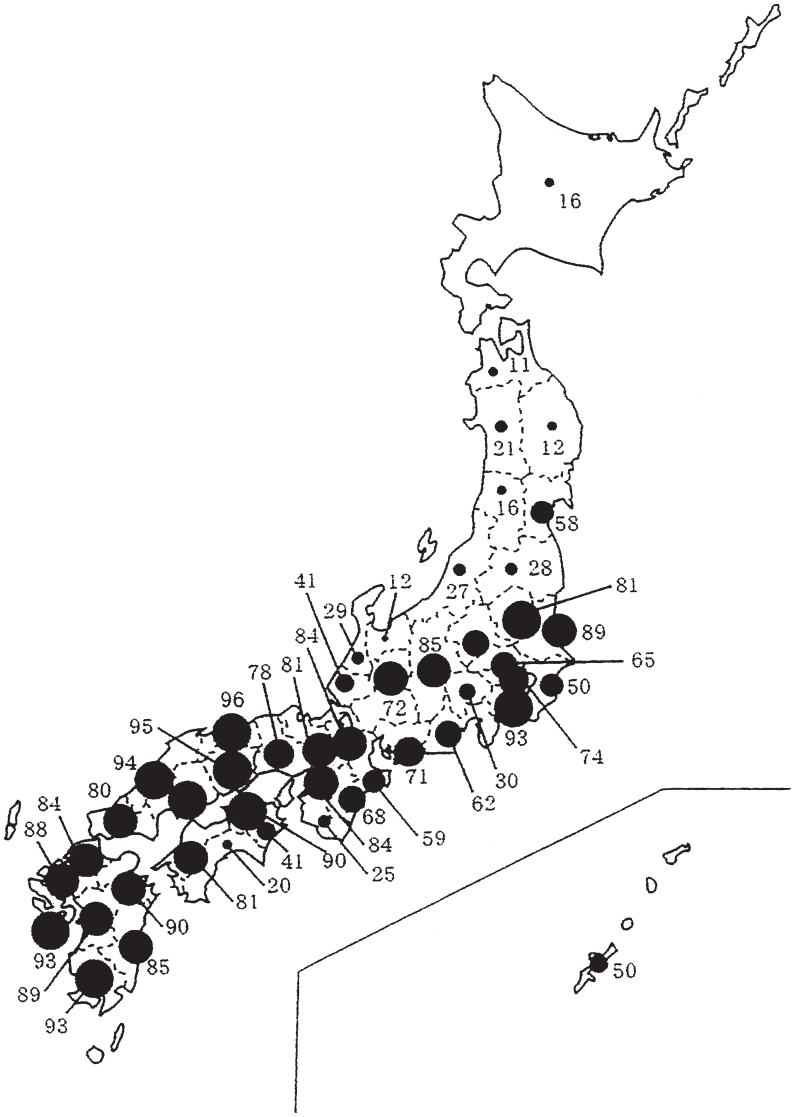


図⑩　▲地名「アラマチ（荒町）」（＜新町）（鏡味明克 1984）

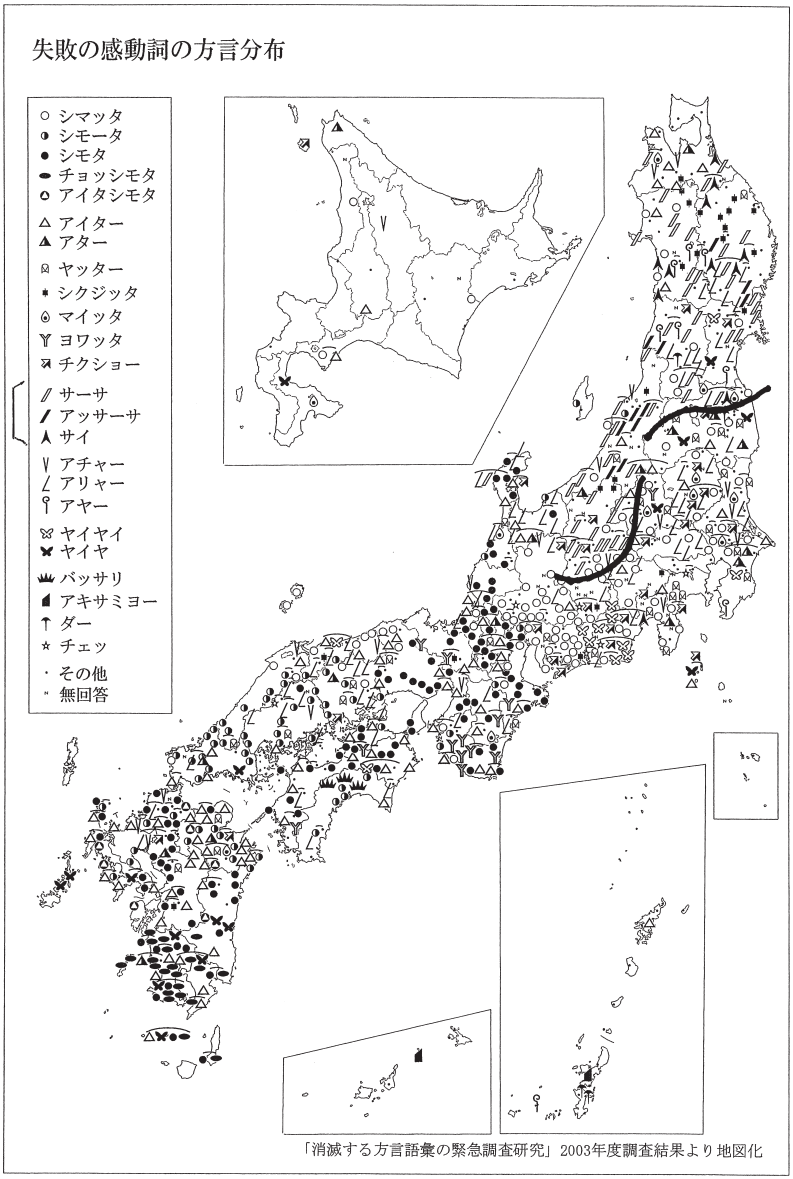


⑪–1　かみさま

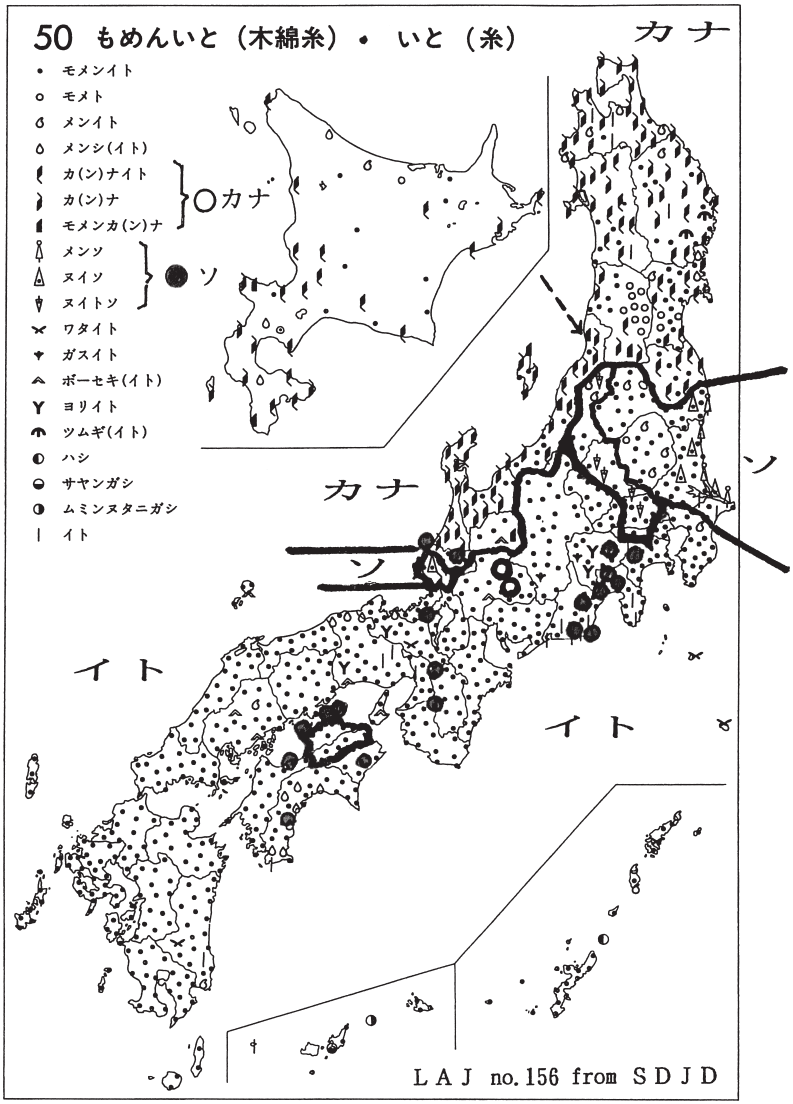
図⑪　▲▼「神様―天の神様」（えらび歌の歌詞）（石井聖乃 2003）


16
11
21
12
16
58
28
27
81
89
65
50
74
93
30
62
59
71
68
84
25
90
41
20
81
12
41
29
84
78
81
96
95
94
80
84
88
90
85
93
89
93
85
72
50

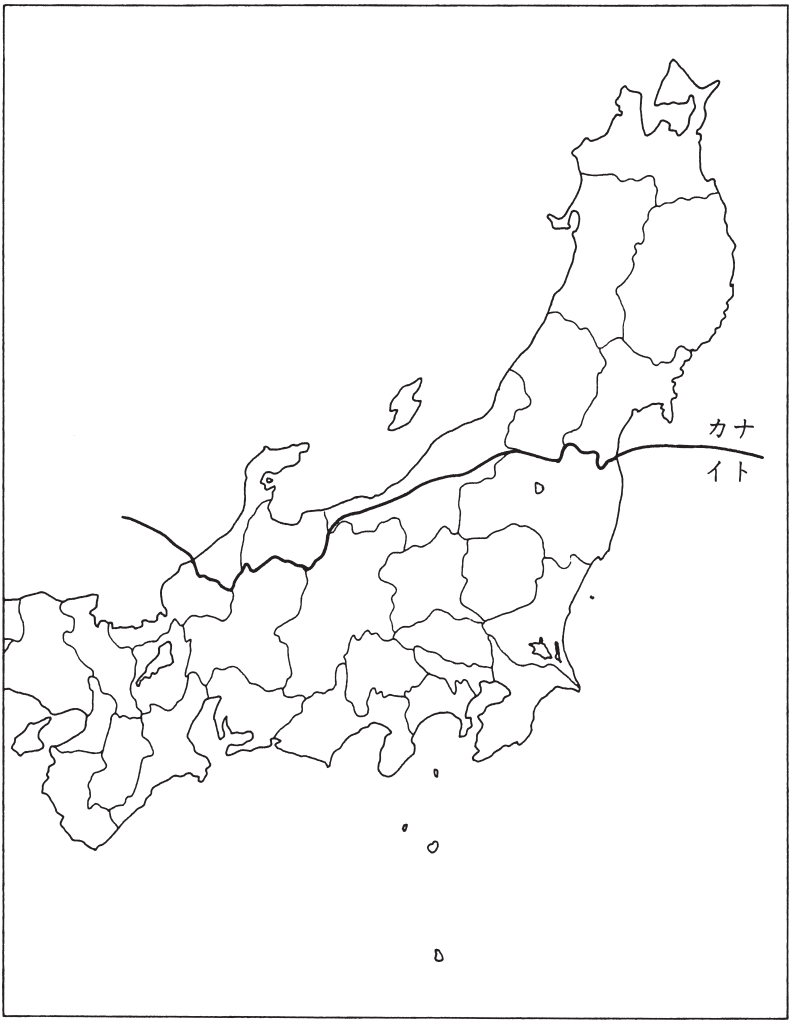
⑪-2　てんのかみさま



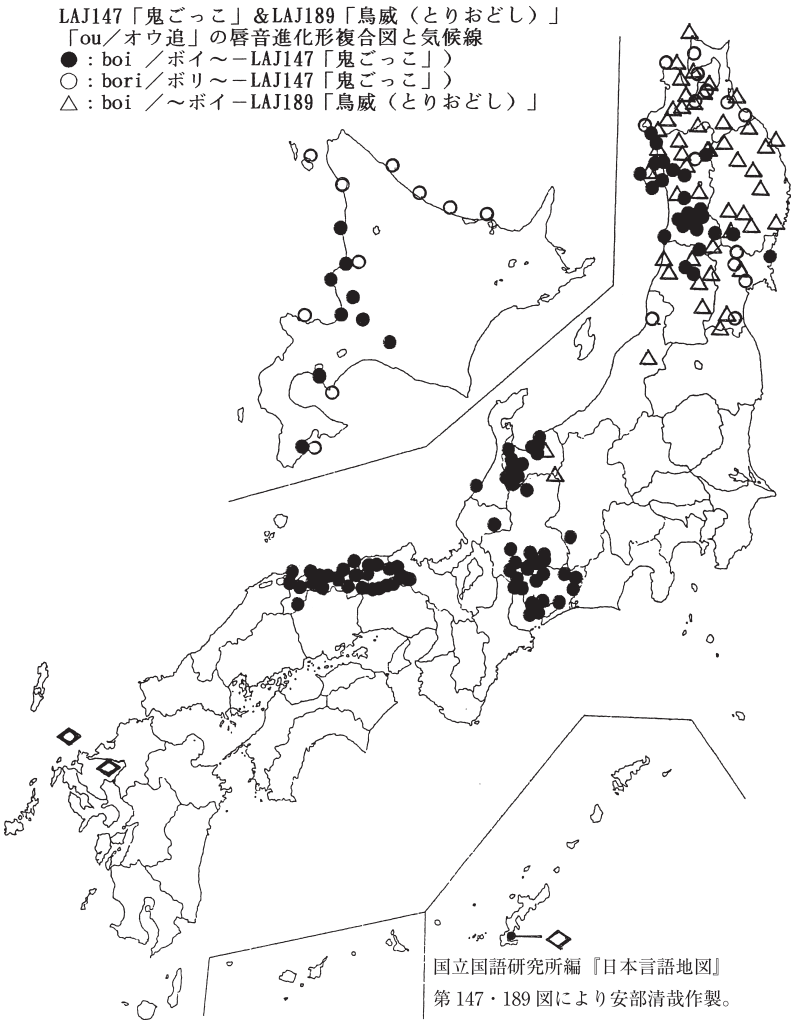
図⑫　▲感動詞「サーサ・サイ」（澤村美幸 2011）



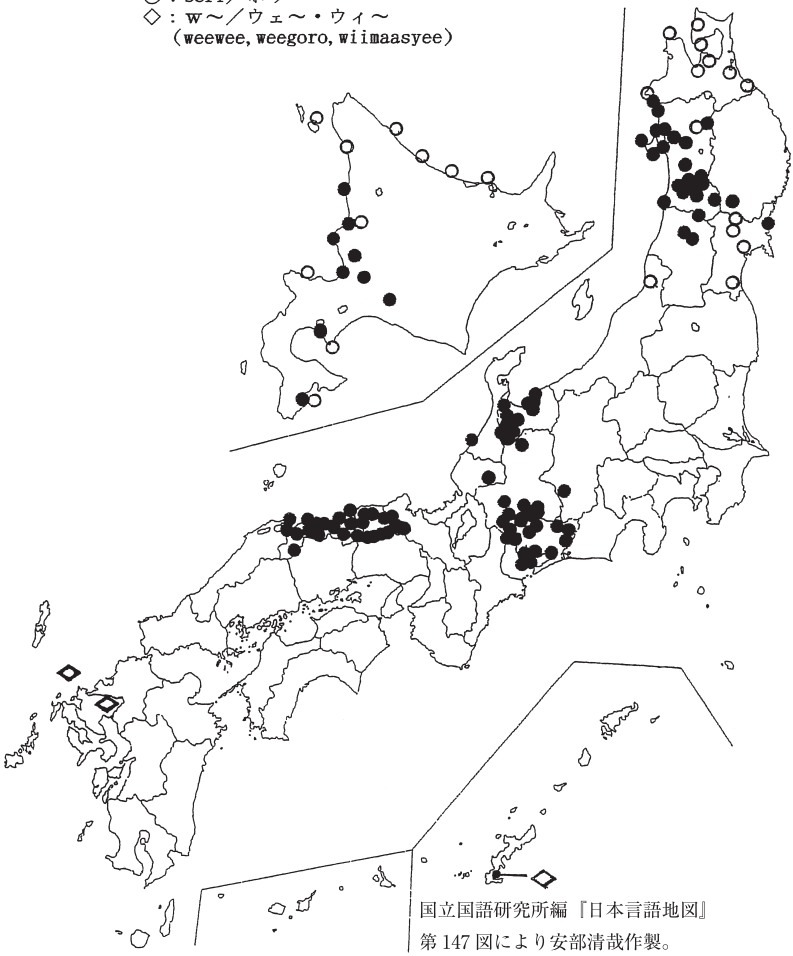
語彙追加図 「糸」「木綿糸」におけるカナ（LAJ153 図・156 図より）



「糸」参考図　カナとイトの境界線（佐藤亮一 1986）



図⑬　▲▼「ボウ（追）」〔唇音 bo―母音 o〕（唇音化）（LAJ147・189）（安部 2008.3）

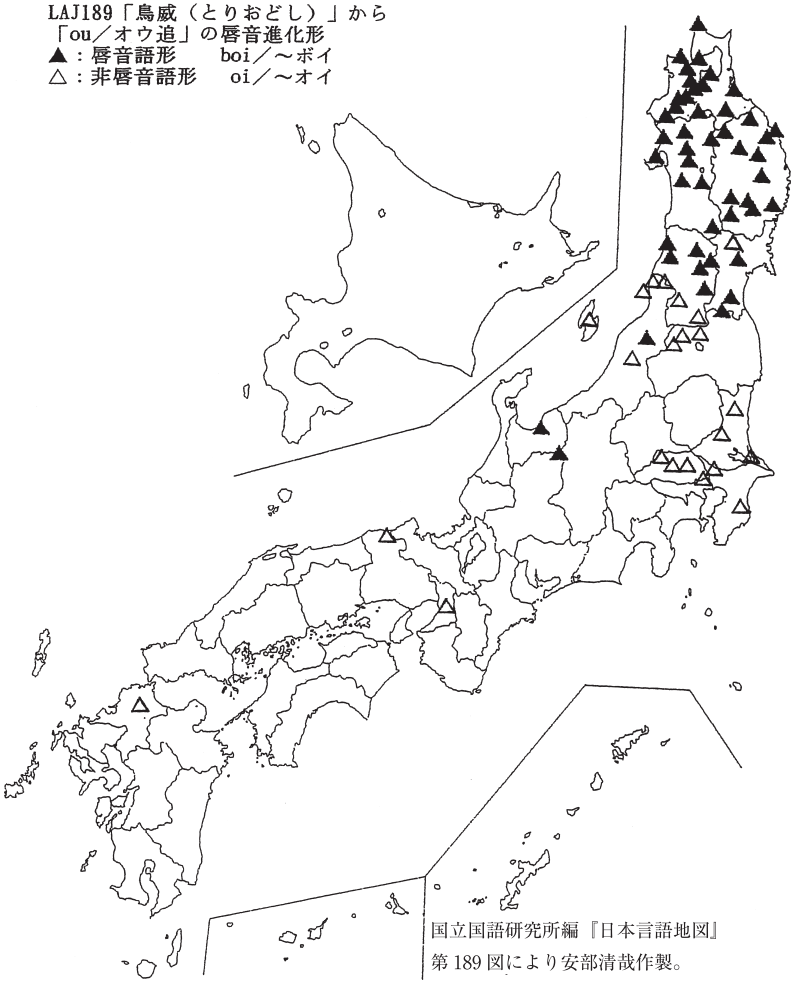


国立国語研究所編『日本言語地図』第 147 図により安部清哉作製。

図⑬-2 「ボウ（追）」（「鬼ごっこ」における「ボイ～」）

「～ボイ（追い）」

LAJ189「鳥威（とりおどし）」から
「ou／オウ追」の唇音進化形
▲：唇音語形　boi／～ボイ
△：非唇音語形　oi／～オイ



国立国語研究所編『日本言語地図』
第189図により安部清哉作製。

図⑬-3 「ボウ（追）」（「鳥おどし」における「～ボイ」）

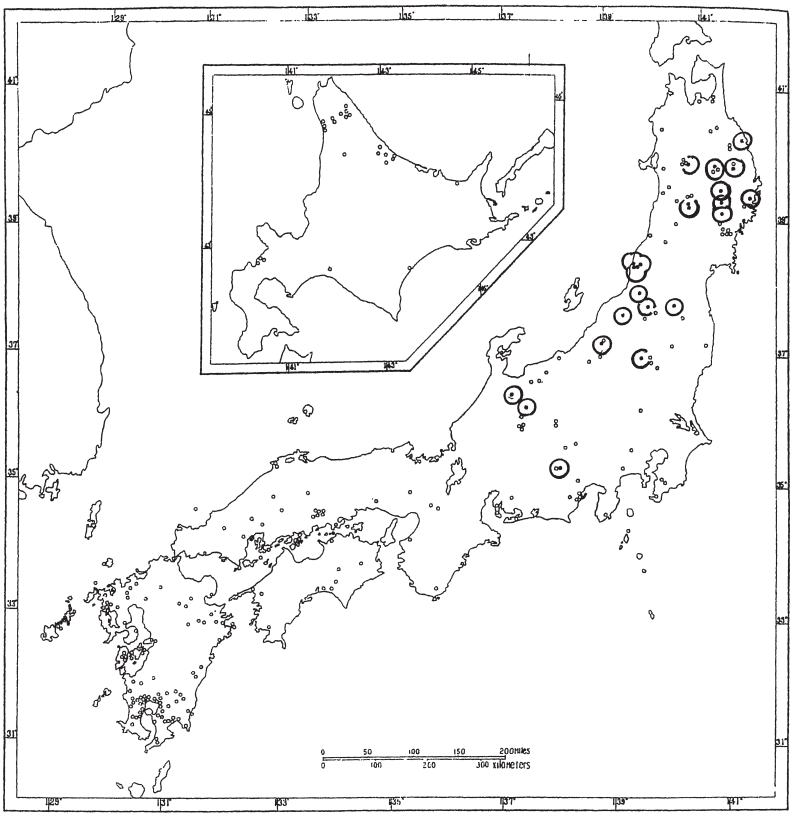
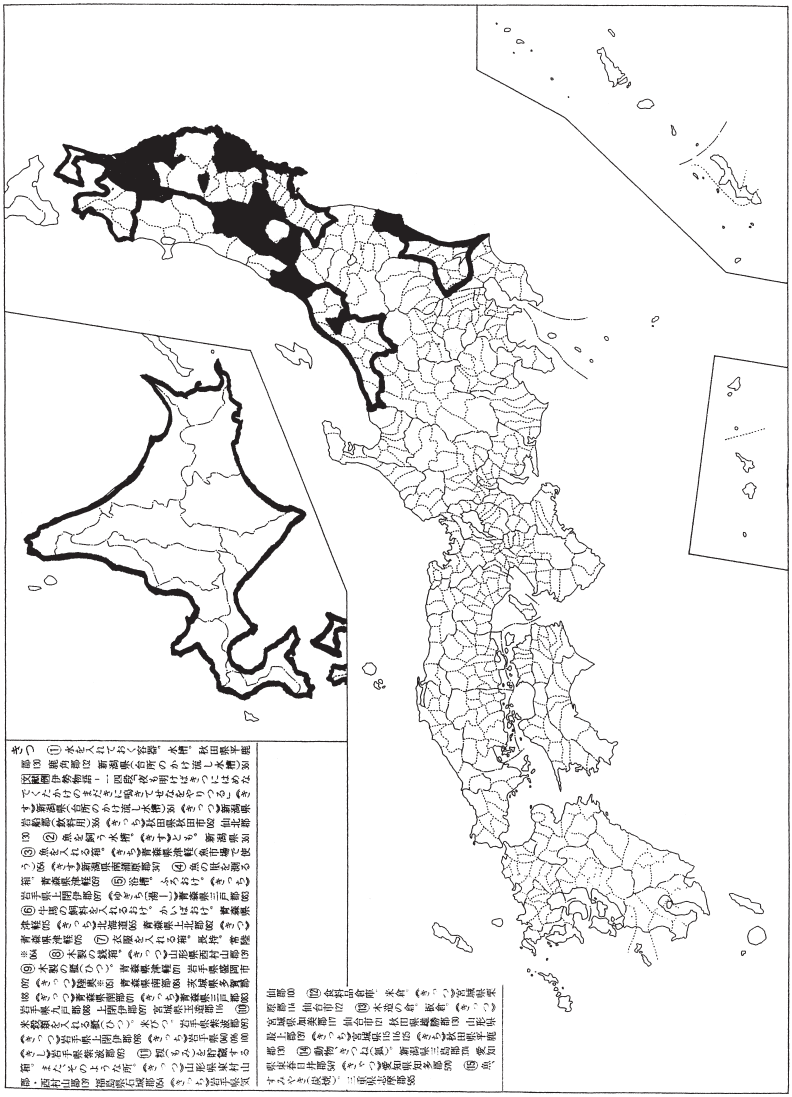


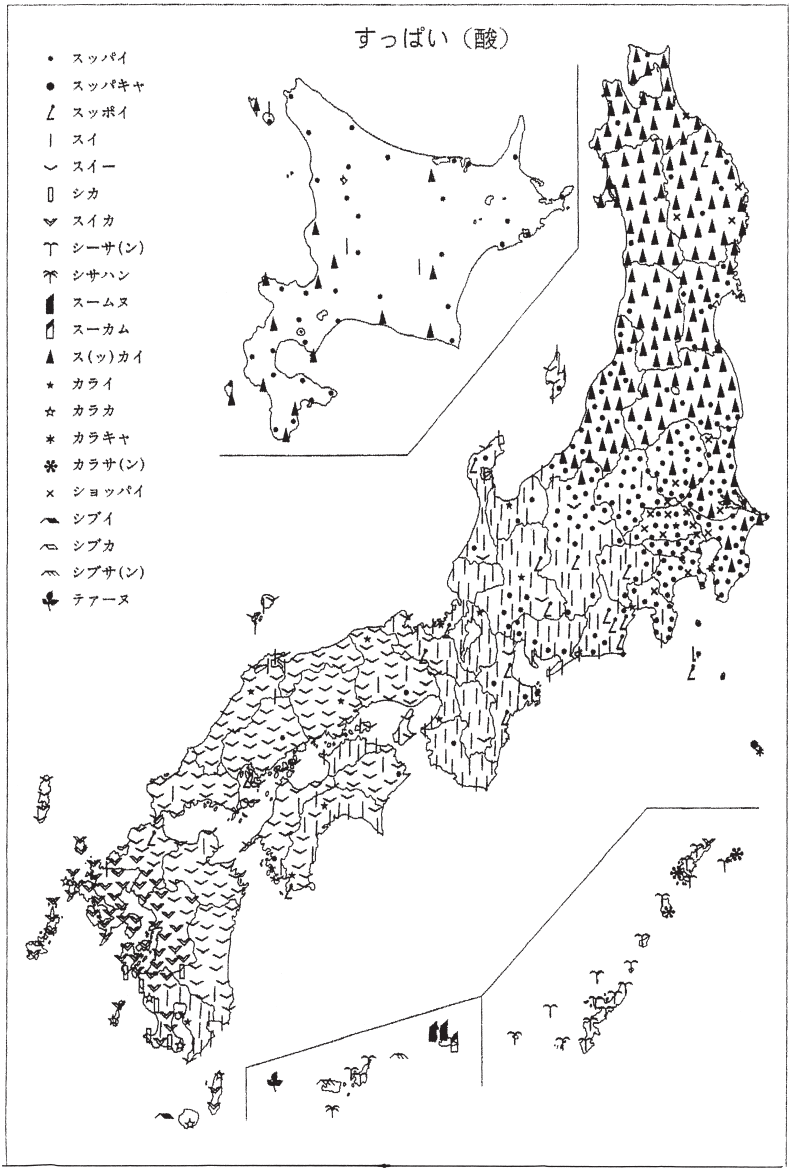
Fig. 295　Udô • Budô

圏点：Udô・Uto（宇藤・宇都）　「洞」「河谷」の意をもつ地名.　Budô は東北日本型分布.
黒点：Budô（葡萄）
└─○にて加筆強調した　鏡味完二　1958

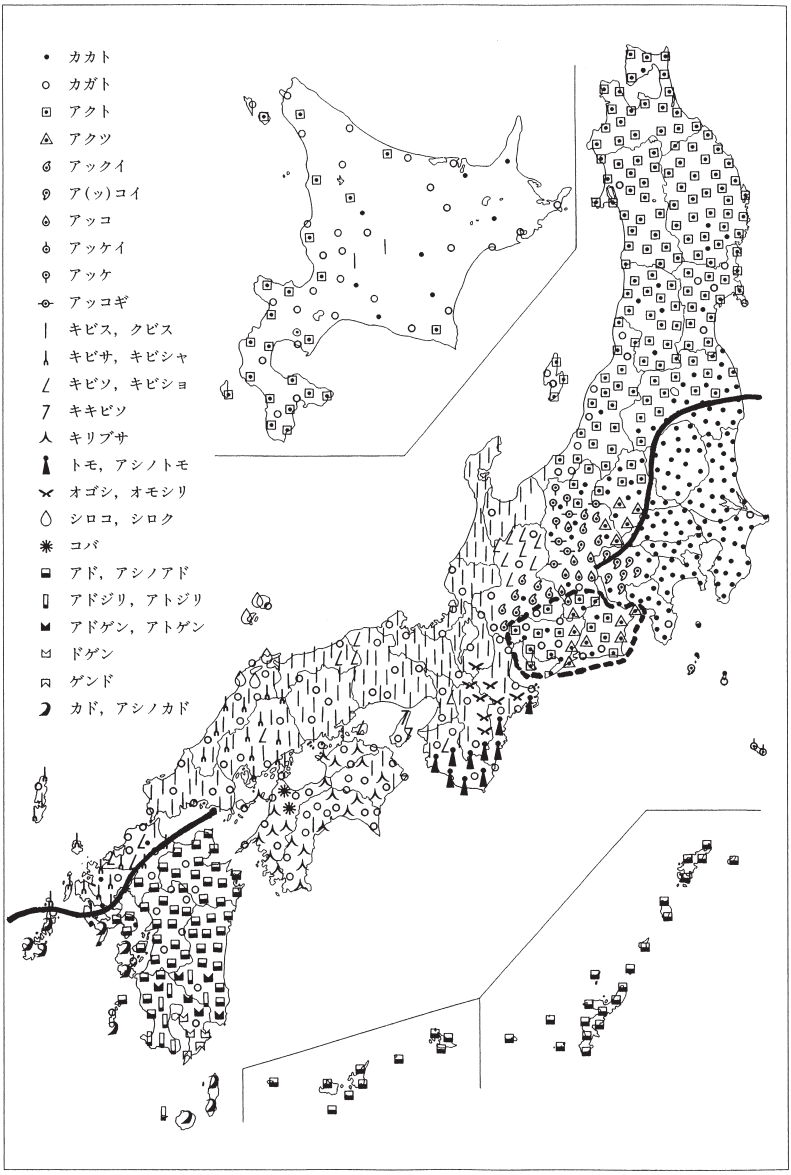
図⑭　▲▼地名「bu–u 対応」〔budo 葡萄–udo・uto 宇藤・宇都〕（唇音化）（安部 2008.3）



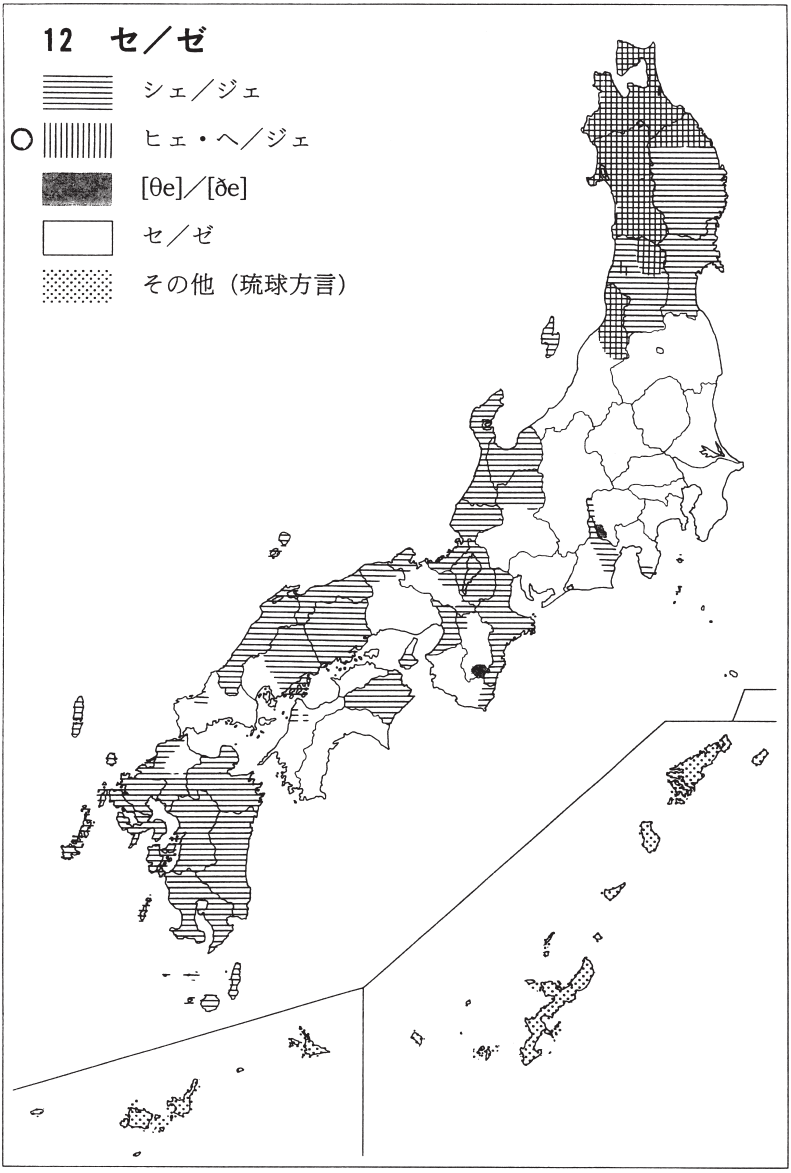
図⑮　▲▼「キツ―ヒツ（櫃）」の〔*kw–p 対応〕（唇音化、喉頭化）（安部 2009.3）



図⑯　▲▼「スッカイ―スッパイ（酸）」の〔*kw–p 対応〕（唇音化、喉頭化）（LAJ41 図）（安部 2009.3）



図⑰　▲▼「アクド対ア（フ）ド（踵）」の〔*kw–p 対応〕（唇音化、喉頭化）（LAJ129 図）（安部 2009.3）

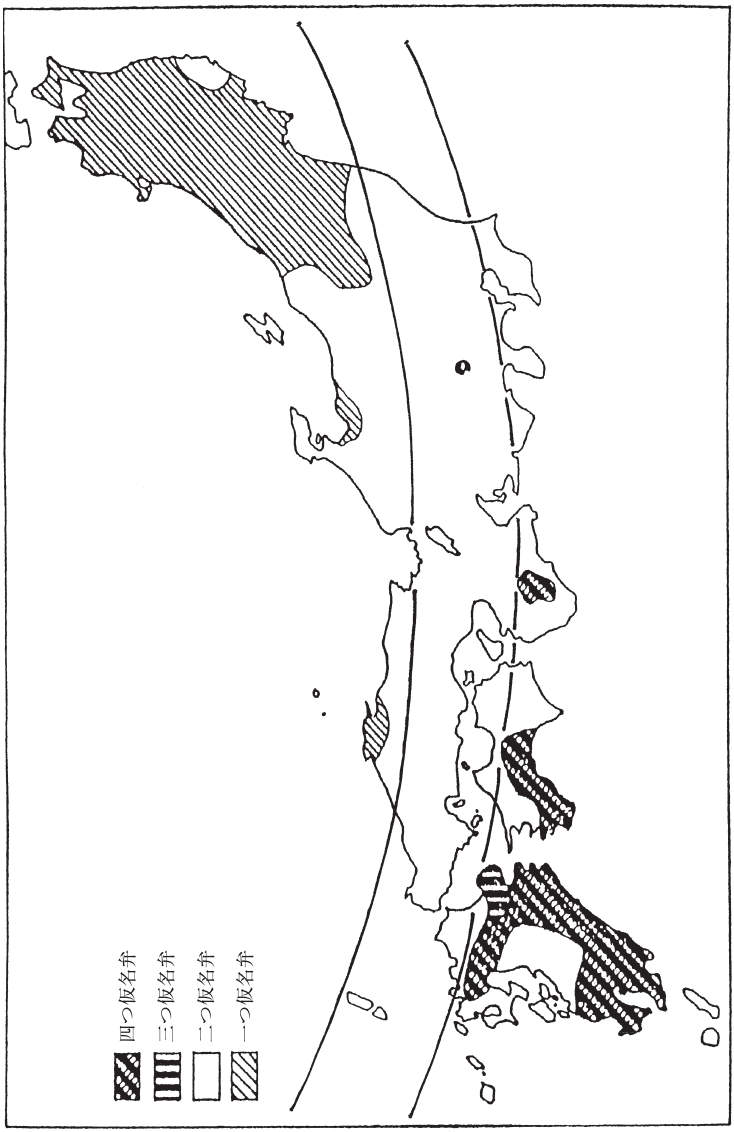


図⑱　▲▼「セ・ゼの発音の口蓋化・喉音化（ヒェ・ヘ）」の分布」（口蓋化）
（地図は「日本方言音韻総覧」掲載）

図⑲–1　u<i（フガシ（東、○）・フゲ（髪、●））

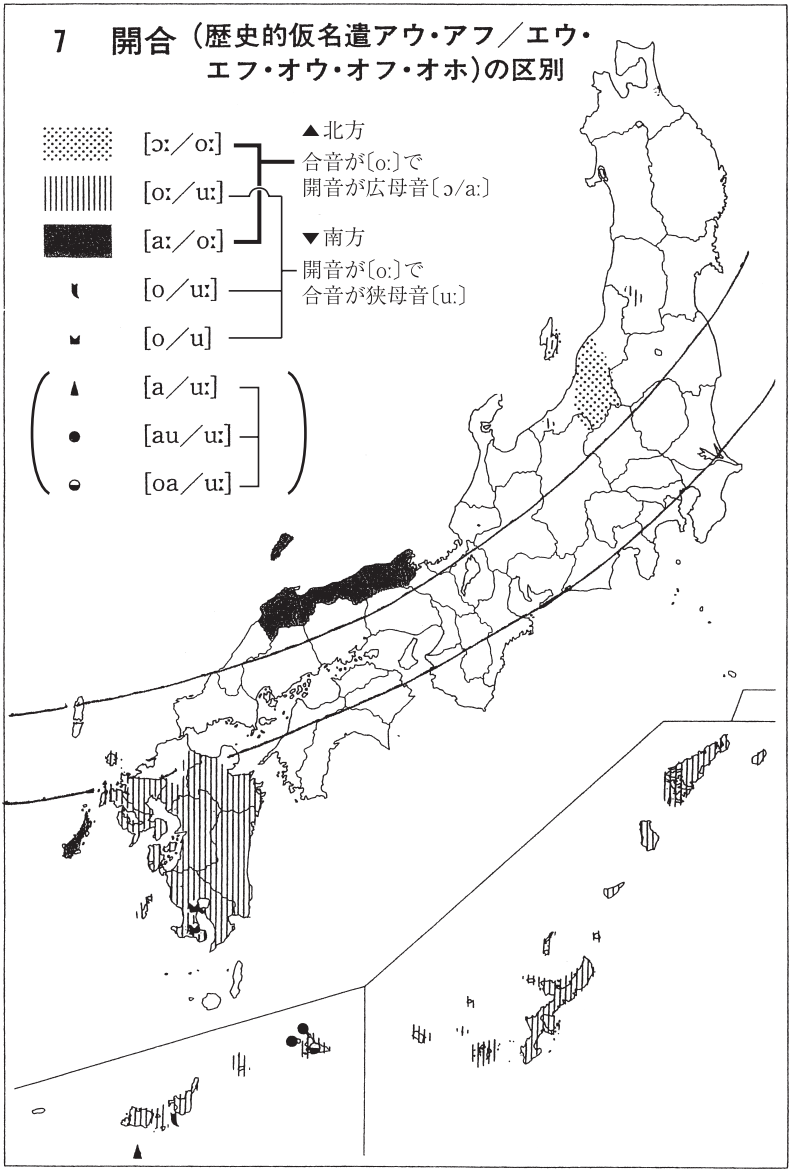
図⑲–2　u<i（フゲ（髪））

図⑲　▲▼「u＜i（フガシ（東）・フゲ（髪）」（iの口蓋化）の分布（LAJI1・12図より安部作図）

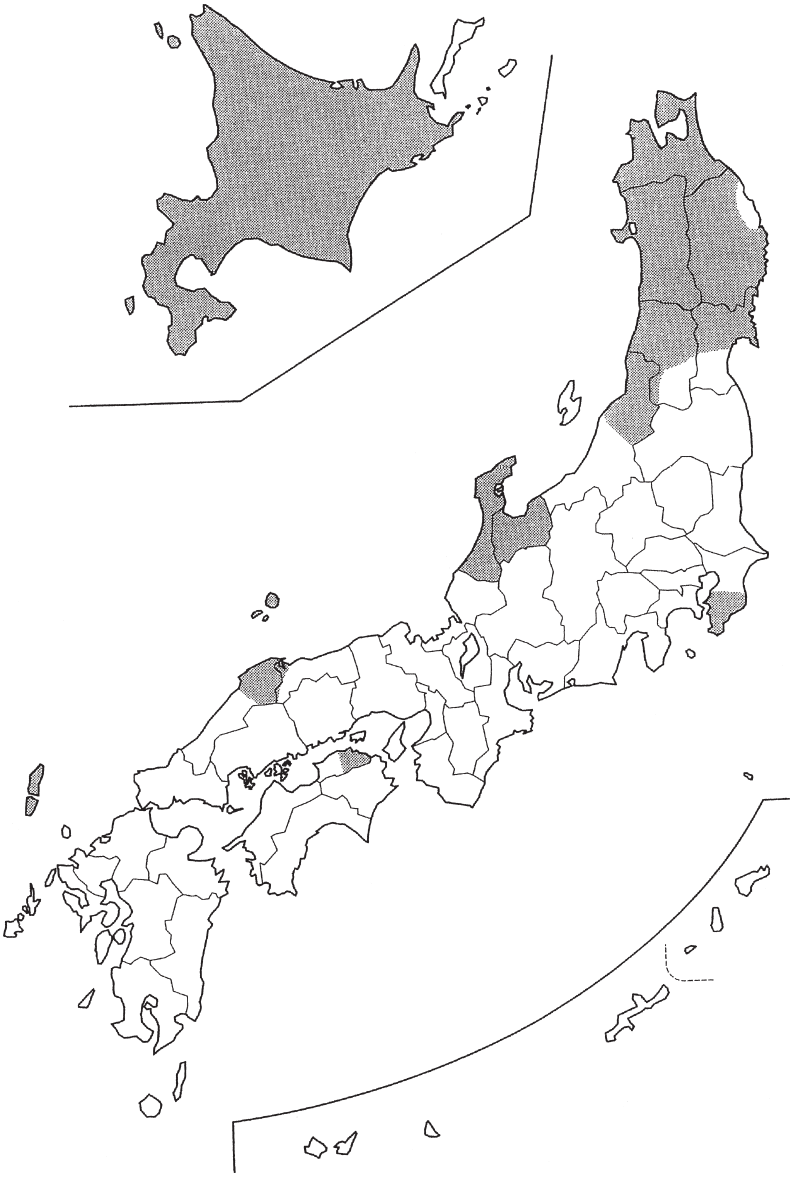


四つ仮名の発音による分類（柴田武、1964）

図⑳　▲▼四つ仮名における「一つ仮名地域／zi／」（i の口蓋化）とそれ以外の地域（柴田武 1964）



音韻追加図　開合の残存における母音の広狭の南北差
（「音韻総覧」より，凡例部分に一部加筆）（安部）



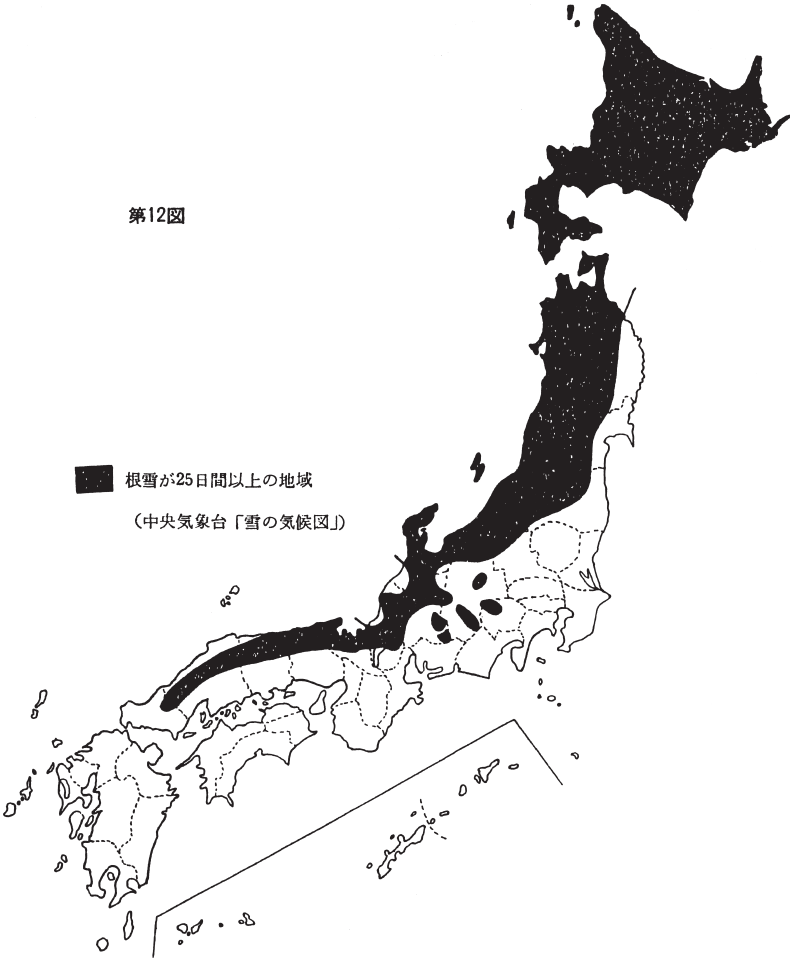
図㉑　▲▼アクセントが母音の広狭により変化する地域▲と変化しない地域▼
（口蓋性・唇音性？）（分布図は真田信治 1989 より）
※房総半島には、徳島・紀伊半島ほかからの歴史的な移住が認められる。

	東　京	富　山	京　都
歌（-a）	○●	○●	●○
川（-a）	○●	○●	●○
胸（-e）	○●	○●	●○
池（-e）	○●	○●	●○
音（-o）	○●	○●	●○
色（-o）	○●	○●	●○
雪（-i）	○●	●○	●○
橋（-i）	○●	●○	●○
犬（-u）	○●	●○	●○
夏（-u）	○●	●○	●○

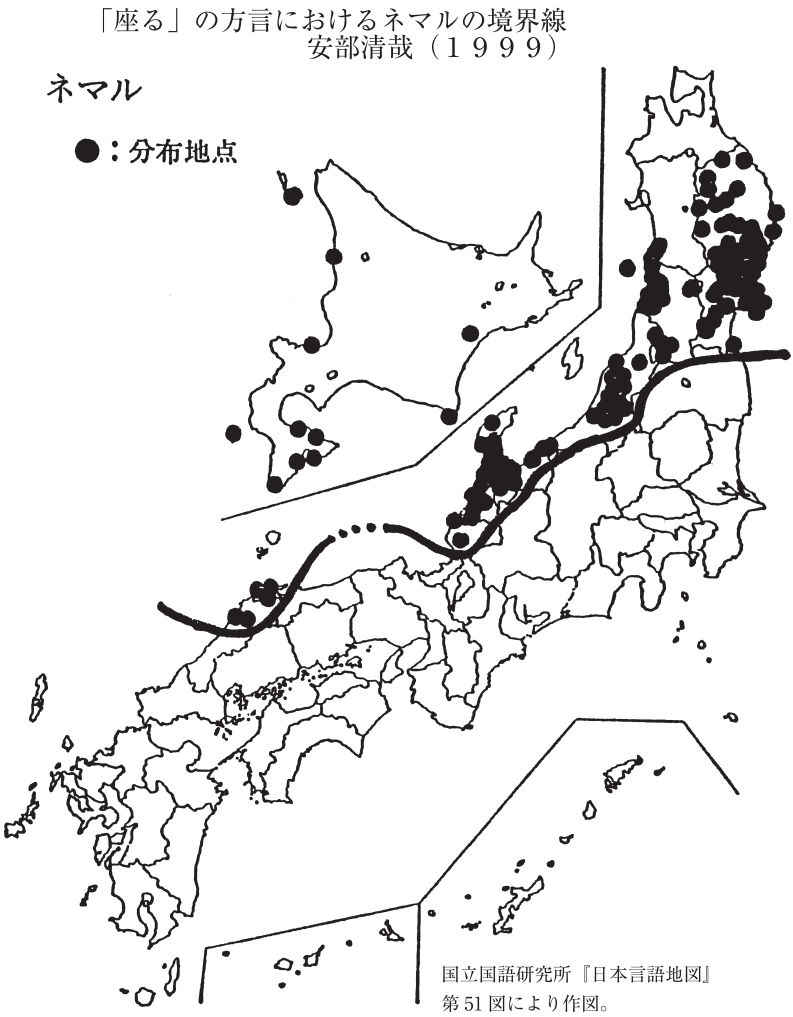
●は高く発音される部分を示し、○は低く発音される部分を示します。富山は、広母音（ア・エ・オ）で終わる単語では尾高形アクセント、狭母音（イ・ウ）で終わる単語は頭高形という規則があることがわかります。

図㉑–2　富山の独特な音韻規則

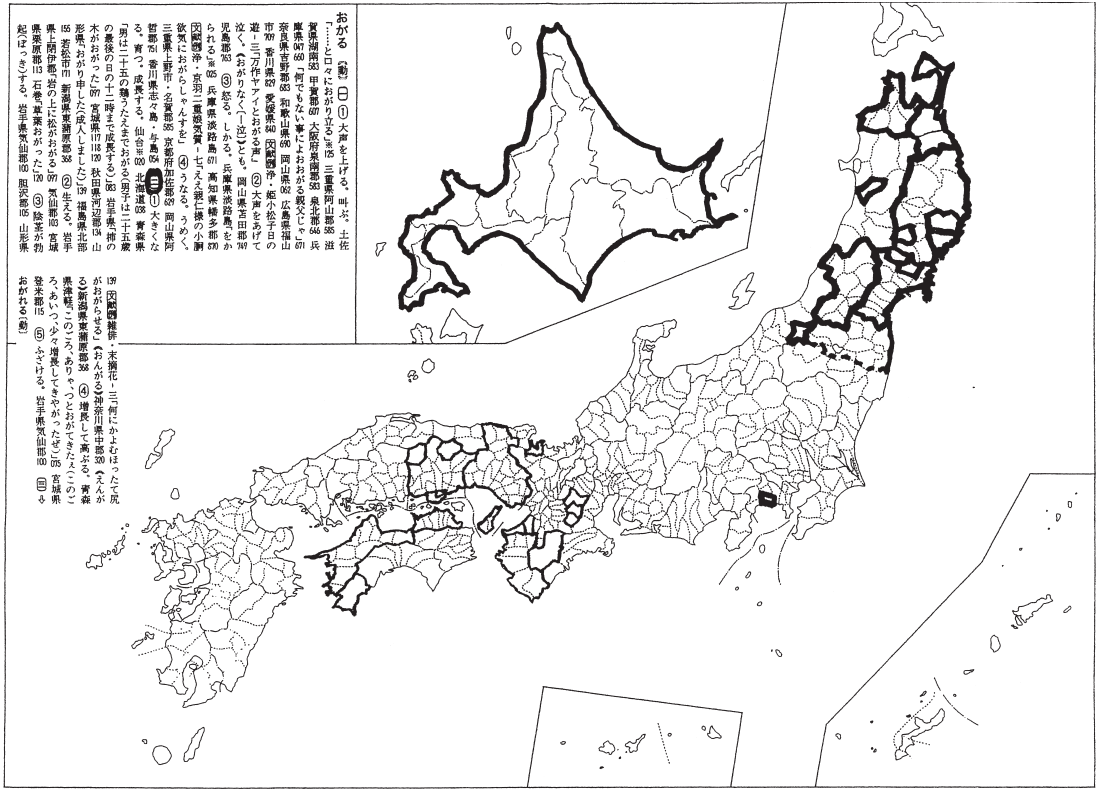
参考表　母音の広狭によるアクセントの変化（真田信治 1989）



参考図　根雪が 25 日間以上の地域
柴田　武（1963）



図㉒　▲「ネマル」の分布（LAJ51・52 図「座る」「あぐら（胡座）をかく」（安部 1999）



図㉓　▲「オガル（生育）」の分布（ogu＜obu 生ふ＋aru）（『日本方言大辞典』での使用地域により安部作図）

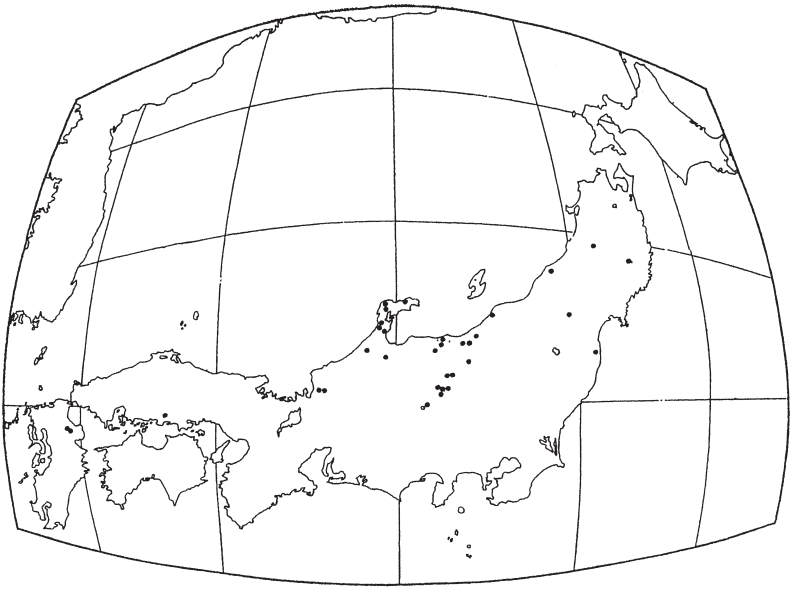
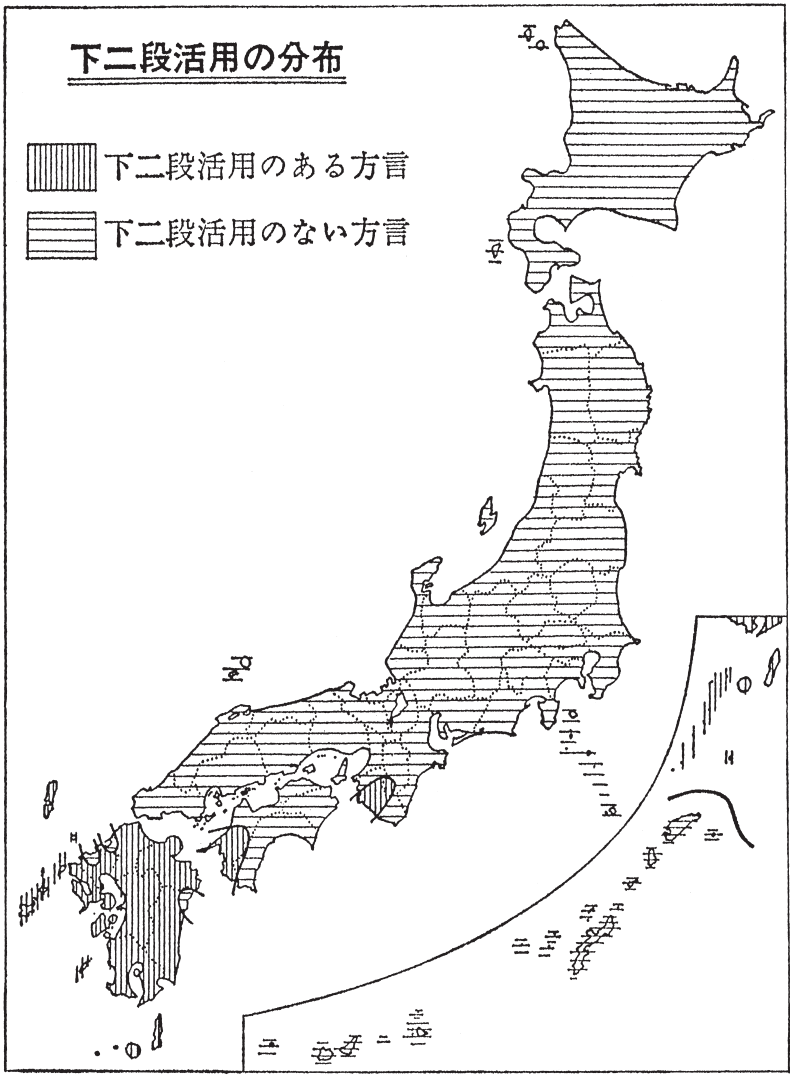


Fig. 141　Kakuma • Kakumi

視点：中部地方の中央，
眼高：600 km，
1方眼：300×300km².

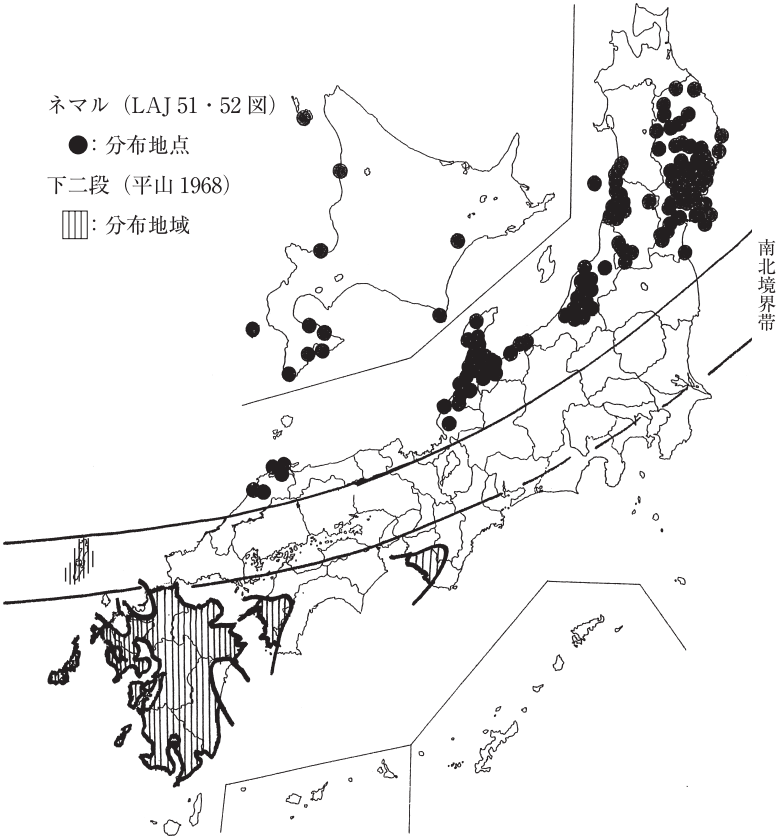
Kakuma には谷頭に立地する例多く，「かぐまる」（＝囲まれる）の方言（秋田地方）によっているだろう．Kakumi は津軽方言で「杓子」のことで，Kakuma と同様の地形語として地名に適用されたものと考える．

図㉔　▲地名「カクマ」（かくまる（囲）＜囲む）（鏡味完二 1958）

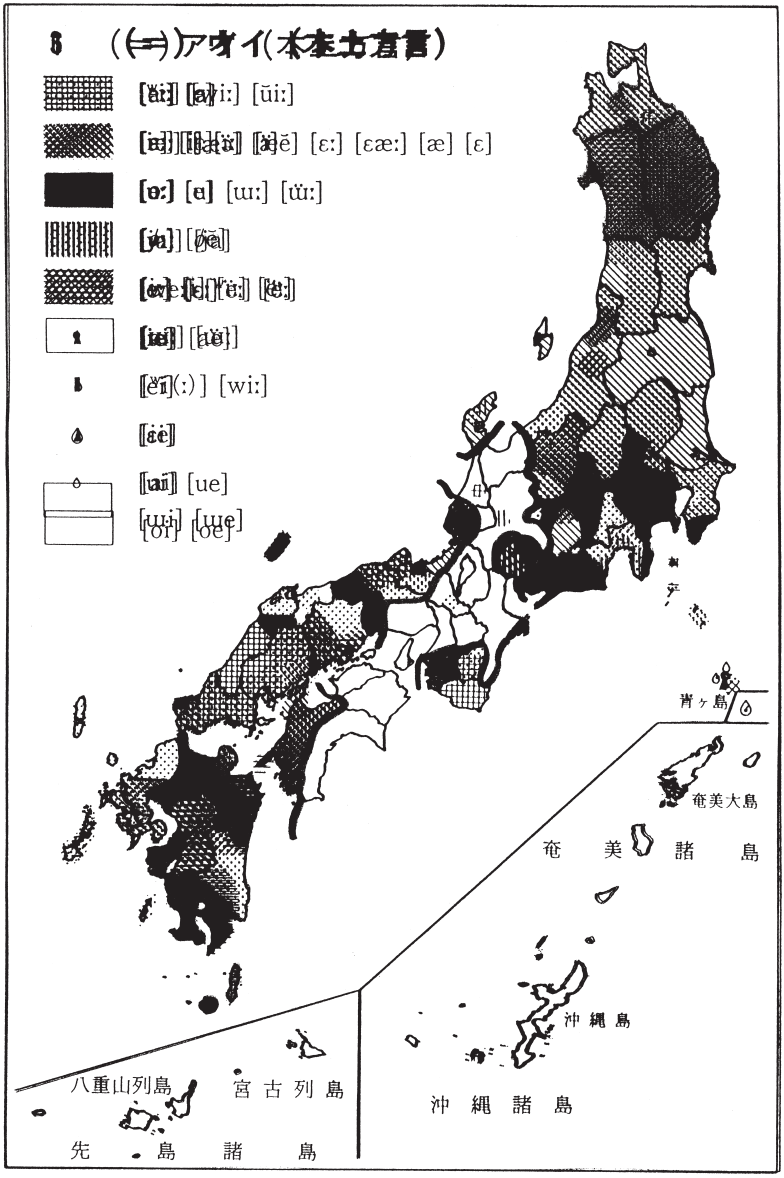


著者の調査に『口語法分布図』を参照して作成した。

図㉕　「下二段（語幹開音節）動詞の優勢残存」（平山輝男 1984 の図、安部 2008.3 指摘）



図㉕–2　日本語方言の南北残存分布（アル型動詞―下二段型動詞）



参考音韻図　連母音「アイ」「ウイ」「オイ」の重ね合せ図に現れる内輪方言分布
（白く抜ける部分、『音韻総覧』の 3 図の重ね合せ）（安部清哉 2014 本稿初出）

【参考文献】

安部清哉（1999.5）「東西方言の諸相と日本語史の課題」『日本語学』18―5

安部清哉（1999.9）「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線“気候線”」『玉藻』35

安部清哉（2001.3）「書評　迫野虔徳著『文献方言史研究』」『国語学』52―1

安部清哉（2002）「方言地理学から見た日本語の成立――第3の言語史モデル理論としての“Stratification Model”――」『グロータース神父記念論集　言地理学の　　課題』明治書院、pp.236―250

安部清哉（2004.7）「地名と日本語――河川地形名の言語空間――」『国文学解釈と鑑賞』69―7

あべせいや（2004.12）「言語地理学と日本語とアジア・環太平洋言語史」『日本語学』23-15,pp.42-54, 明治書院

安部清哉（2006.3）「アジアと日本列島における言語・文化境界線“気候線”（摂氏0度線）――言語地理学と文化地理学から――」『学習院大学文学部研究年報』52

安部清哉（2007.3a）『言語成層論モデルによる日本語とモンスーン・アジア地域の言語史に関する基礎的研究（平成15-17年度科研費（基盤研究（C）成果報告書）』、pp.210.、私家版

安部清哉（2007.10）「中国語・日本語・朝鮮語の東アジア言語におけるある種の「音韻対応」（k・x―p）」王鉄橋・「女＋兆」灯鎮主編『国際化視野中的日本学研究――紀念胡振平教授従教授45周年（東亜日本学国際検討会論文集）』（洛陽・東アジア日本学国際シンポジウム論文集）pp.31-39. 天津・南開大学出版社

安部清哉（2008.3）「アジアの中の日本語」『方言の形成（シリーズ方言学1）』pp.123-167, 岩波書店

安部清哉（2009.3）「『きつ（にはめなで）』（『伊勢物語』十四段）の日本語方言及びアジア言語の中の位置」『国文学言語と文芸』125、pp.37―58. おうふう社

安部清哉（2011.3）「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立――「五味」とスイ・スッパイ・スッカイの語源（中国語「酢」）の再検討――」『人文』9、学習院大学人文科学研究所、pp.7―34.

安部清哉（2012.3）「東アジア言語（日本語・中国語・朝鮮語）の南北方言の音韻対応から推定された紀元前1万年前の『呼気量変化』（口腔鼻腔流出量比率変化）とその要因について」『人文』10（学習院大学人文科学研究所）、pp.7―39.

安部清哉（2013.2）「日本語方言における『南北方言分布』（語彙音韻文法）の特徴」『玉藻』47

安部清哉（2013.3）「日本語およびアジア言語における「南北方言分布境界線」から見たインド・ヨーロッパ語二大分派Centum-Satemの境界線」『東洋文化研

究』15（学習院大学東洋文化研究所）
安部清哉（2013.5）「気候は、言語・方言を作るか？――アジア言語の“Centum-Satum 的基層語派“を区画する地理的指標となるか――」『日本語学』32-6（409 号、2013 年 5 月号）
石井聖乃（2003）「えらび歌の地域差に関する調査研究（研究ノート）」『東京女子大学言語文化研究』12
大橋勝男（2008）『日本海沿岸方言音声の研究』おうふう
大橋勝男（2008）『太平洋沿岸方言音声の研究 上・下』おうふう刊
鏡味明克（1984）『地名学入門』大修館
鏡味明克（1985）『地名が語る日本語』南雲堂
加藤正信（1989）「現代日本語　方言」『言語学大辞典』「日本語」三省堂
迫野虔徳（1998）『文献方言史研究』清文堂
佐藤亮一（1986）「方言の語彙」『講座方言学 1 方言概説』国書刊行会
佐藤亮一監修（1991）『方言の読本』小学館
真田信治（1979）「標準語の地理的背景」『日本の方言地図』、中公新書
真田信治（1981）「日本海型方言分布パターン」『言語生活』360、筑摩書房
真田信治（1989）『日本語のバリエーション』アルク
澤村美幸（2011）『日本語方言形成論の視点』岩波書店
柴田　武（1963）「単語の全国分布」『人類科学』15 新生社
柴田　武（1964）「方言の源流をたどる」『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』第四章五、平凡社
徳川宗賢（1979）『日本の方言地図』中公新書
福田良輔（1972）「東国方言の国語史的意義」『万葉集［Ⅱ］――言語と歌論――（大東急記念文庫文化講座講演録』大東急記念文庫、「複語尾る――カハル（交フ）、サハル（サフ）、カカル（懸ル）、ほか」）
馬瀬良雄（1992）『言語地理学研究』桜楓社
室山敏昭（2001）『アユノカゼの文化史―出雲王権と海人文化』、ワン・ライン（出版）

【訂正】安部（2013.3）における以下の音韻変化の部分（499 頁）を点線部のように修正いたします。（問題点をご指摘下さった土田滋先生に感謝致します。）

安部（2013.3）「日本語およびアジア言語における「南北方言境界線」から見たインド・ヨーロッパ語族二大分派 Centum-Satem の境界線」『東洋文化研究』15

9—1　Centum-Satem の音韻対応からみた日本語の 2 つのサ行音と 2 つのカ行音の可能性

……「アメ—サメ交替（雨）」と言われていまだ定説がないなぞの「s」を指摘しておきたい。この「s」音の正体が、この k–s 対応における s である可能性がある。それは、例えば、極めて［h］に近い［k^h］として説明可能な［k^h］があり、それが s との交替形として現れたものであると説明されることになる。その音変化は口蓋化として次のように説明可能である。

この比較研究は、古代のアメ—サメ交替の正体として、［$^*k^h$ame—same］という新たな仮説を提示する。なぜなら、従来の説では、s 音の挿入ないし脱落の 2 案でしか検討されてきていないからである。

修正　　**k^h（＝k’）＞k^j＞kj＞k^sj＞$^k s^j$＞s^j＞s**

（修正前）　k^h（＝k’）＞k^j＞k^tj＞k^{ts}j＞ts^j＞sj＞s

以上